

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1991年度 年 報



財団法人栗東町文化体育振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した、1991年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助事業発掘調査の概要を掲載したものである。
2. 調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が調査主体となり、財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助事業発掘調査は、栗東町教育委員会によるものである。
3. 調査担当は、平井寿一、大崎隆志、近藤 広、雨森智美、佐伯英樹、猿向敏一、橋本奈保子、清水好洋（町教委兼務）が行った。
4. 本書の作成は、調査内容について各担当者が行い、編集を執筆者の意向をもとに近藤が行った。
5. 遺跡位置図（P 4）の遺跡番号は、「平成 2 年度滋賀県遺跡地図」滋賀県教育委員会 1991 による。尚、各調査内容中の調査地位置図は、スケールの指定していないもの以外は、全て5000分の1に統一してある。

目 次

例言・目次	1	十里遺跡	62
事業報告・動向	2	總 遺 跡	63
調査一覧表	3	霊仙寺遺跡	64
遺跡位置図	4	堂山古墳群	68
事業団調査		山田遺跡	70
辻 遺 跡	8	国庫補助調査	
高野遺跡	14	辻 遺 跡	72
狐塚遺跡	22	高野遺跡	73
手原遺跡	32	總 遺 跡	74
野尻遺跡	34	十里遺跡	76
下鈎東遺跡	43	岡 遺 跡	78
下鈎遺跡	44	下鈎遺跡	82
上鈎遺跡	50	林 遺 跡	83
中沢遺跡	54	表紙の写真 狐塚遺跡(帆立貝式古墳)	

事業報告

動 向

1. 発掘調査事業

総事業費 99,399千円

当年度受託	27件
1990年度からの継続	14件
国庫補助事業等への職員派遣	7件

2. 普及啓発事業

(1) 現地説明会 (共催)

狐塚遺跡	1991年6月8日	84名
岡 遺 跡	1991年11月16日	70名
狐塚遺跡	1991年12月8日	52名
下鈎遺跡	1991年12月14日	138名

(2) 文化財講座 (共催)

狐塚遺跡	1992年1月25日	15名
辻 遺 跡	1992年2月1日	88名
山 田 窯	1992年2月8日	90名

(3) スライド報告会及び速報展 (共催) (1990年度調査分)

発掘調査スライド報告会	
1991年7月6日	39名
中沢遺跡、地山古墳、狐塚遺跡 雲仙寺遺跡	
速報展	1991年6月30～7月14日
於 栗東歴史民俗博物館	

のべ600名

岡遺跡・地山古墳他9遺跡の展示

(4) 部内研修 作業員等研修

「弥生と古墳」 大阪府堺市・和泉市
1991年5月24日

(5) 遺跡表示石柱建立

「雲仙寺遺跡」 1992年3月

(6) 刊行物

「1990年度 年報II」 1992年3月
「栗東の文化」 vol.25.26.27.28

(7) 体験—おもしろ歴史教室

1991年5月11日～6月8日
毎週土曜日5回 31名

調査地は、辻・高野・狐塚・野尻・下鈎遺跡に集中し、調査原因としては、倉庫・共同住宅建築が急増している。圃場整備関連の調査は本年度が最終年度となった。

辻・高野遺跡は、古墳時代の集落跡としてよく知られており、本年度の調査でも竪穴住居等が調査され、新たな資料の追加があった。また、辻遺跡は、江戸時代初期から多くの鋳物師を輩出した辻鋳物師の本拠地でもある。今までの調査でも鋳型等の出土があったが、今年度の調査では、江戸時代末期の鋳物工場跡の発見があり、弾丸等の鋳型の出土があった。文献資料とも合致し、動乱の世情を反映する遺物として興味深いものがある。

狐塚遺跡では、一辺10m前後の群集する小規模墳から、墳長32mの帆立貝式古墳までの古墳群の発見があった。近在する椿山古墳および新開古墳を含む安養寺古墳群の中で、重要な発見である。また、帆立貝式古墳からは、陶製埴輪と共に木製埴輪の出土があり、今後の古墳研究に大きな影響を与えるものと思われる。

一方、岡遺跡、中沢遺跡でも同様の墳墓群の発見があり、堂山古墳群では、円墳1基が確認され、大きな成果が上がっている。

中沢遺跡では、墳墓群の発見と共に、古墳時代前期の河道から多量の木製品の出土があった。そのうちの建築部材については、建造物の詳細を知る手がかりとして、貴重な資料である。

下鈎遺跡では、縄文時代前期の竪穴住居群の発見があった。町内では、中期の雲仙寺遺跡・狐塚遺跡が縄文時代の遺跡の代表であったが、今回の発見で、さらなる貴重な資料が追加された。

丘陵地帯では、山田遺跡の須恵器窯が調査されている。

鶴巻町文化体育振興事業団・埋文調査

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
1 辻	辻字菜畑409-1-431	倉庫建設	竈穴住居、土壇、溝、流路(古)	土師器、須恵器、滑石製品	8, 9	大崎
2 辻	辻字小坂西417-1-418-1	倉庫建設	周溝状遺構・流路・ピット(古)	土師器、須恵器、陶磁器、瓦	10, 11	近藤
3 辻	辻字西出407-402-403-1-404-1	倉庫建設	竈穴住居・土壇・溝・流路(古) 跡部遺構遺構(江～明)	土師器、須恵器、陶磁器、瓦 土製品、埴輪、鉄釘、滑石製品	12, 13	近藤
4 高野	高野字イハバシ334-1	倉庫建設	竈穴住居・土壇・溝・ピット(古)、溝	土師器、須恵器	14, 15	近藤
5 高野	高野字下戸当572	造成工事	竈穴住居・土壇(古)	土師器	16, 17	佐伯
6 高野	高野字下戸当571-1-580-1	事業所建設	流路、溝、櫓列(古) 土壇(江～明)	土師器、須恵器、灰陶磁器、石碁	18	近藤
7 高野	大橋4丁目258	共同住宅	竈穴住居・土壇・溝(平)	土師器、黒色土器	19	清水
8 高野	大橋4丁目318-319	共同住宅	竈穴住居・土壇・溝(平)	土師器、黒色土器	20	清水
9 高野	大橋4丁目295-2-295-3	共同住宅	竈穴住居・土壇・流路(平)	土師器、黒色土器	21	清水
10 狐塚	安養寺7丁目593	造成工事	円溝・方溝・土壇(古) 竈穴住居・土壇(古)	円筒埴輪、朝顔形埴輪、鉄釘、勾玉、ガラス小玉、紡錘車、須恵器、土師器	22～25	雨森
11 狐塚	川辺字島田196-1	共同住宅	流路(溝)、ピット(中世)	縄文土器、土師器	26	雨森
12 狐塚	安養寺7丁目618-619	造成工事	溝(古・中世)、ピット(中世) 溝(古・中世)	縄文土器、土師器、石碁、銅片	27	雨森
13 狐塚	安養寺7丁目616-1	倉庫建設	古墳跡(古) 竈穴住居(古・中世)、土壇(縄)	円筒埴輪、朝顔形埴輪、瓦形埴輪、須恵器、土師器	28～31	雨森
14 手塚	手塚7丁目833-834	倉庫建設	竈穴住居・溝、土壇(古～中世)	須恵器、土師器、黒色土器	32, 33	大崎
15 野尻	熊子台々370	区画整理	流路(縄)・古)、竈穴住居・井戸・溝・土壇(平～縄)、地面跡(江)	縄文土器、土師器、須恵器、土師器、黒色土器、陶磁器、鉄釘(古)	34～39	横内
16 野尻	下野・野尻	道路改良工事	溝、ピット、土壇(古～縄)	土師器、須恵器、黒色土器、中世陶器	40, 41	橋本
17 野尻	熊子字カシ内397-1-398-1	社員寮	溝(古)、竈穴住居・土壇・溝(縄)	土師器、須恵器、黒色土器	42	清水
18 下野	上野字辻高26-1-28-1	事業所建設	溝(古)	土師器、須恵器	43	橋本
19 下野	下野地先	造成工事	堀、区画跡(縄)	縄文土器、土師器、須恵器、石碁	44, 45	橋本
20 下野	下野字高田716	事業所付倉庫	溝(古・古)	土師器	46	橋本
21 下野	河原字溝端156	倉庫建設	溝、ピット	土師器、須恵器、黒色土器	47	橋本
22 下野	下野字口737-3	住宅建設	溝込み(古)、土壇	土師器	47	雨森
23 下野	下野字秋440-1	倉庫建設	竈穴住居・土壇・ピット(縄) 井戸・櫓列・溝・流路(中世)	縄文土器、須恵器、土師器、中世陶器、滑石製品(石碁・石岸柱か)、耳鈴	48, 49	近藤
24 上野	上野字中田夫224-1	造成工事	井戸(縄)、井戸(縄)	斎申、須恵器、土師器、黒色土器、瓦	50, 51	佐伯
25 上野	上野314	店舗建設	竈穴住居(古・平)	須恵器、土師器、黒色土器	52, 53	大崎
26 中沢	中沢字中畑196ほか	造成工事	方形周溝溝・溝(郭)、流路(郭へ古)、溝・溝・溝・竈穴住居・竈穴住居(古)	弥生土器、石碁、石棺丁、土師器、須恵器、木製農具類、建築部材	54～59	平井
27 中沢	中沢字大畑256	共同住宅	流路・溝(古)	弥生土器	60, 61	平井
28 十里	十里字北の口138-1-138-2	病院併用住宅	方形周溝溝・溝・流路(郭)、小溝	弥生土器	62	清水
29 藤	藤字北芝塚312-2-313-2	宅地造成	溝(平)	須恵器、土師器、黒色土器	63	清水
30 雲仙寺	雲仙寺字南長尾52-1-54-1	倉庫建設	溝・土壇(郭)、竈穴住居(古)	弥生土器、石碁	64, 65	大崎
31 雲仙寺	雲仙寺字長尾538-1ほか	事業所建設	流路(古)	土師器、なすび形土製品、鉄釘	66, 67	橋本

町事業・埋文調査

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
32 堂山古墳群	大池蔵字堂山	確認調査	古墳1基(古)	須恵器	68, 69	佐伯
33 山田遺跡	下戸山遺跡318-2	造成工事	瓦陶器窯1基(白)	須恵器、平瓦	70, 71	佐伯

国庫補助事業・埋文調査

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
34 辻	辻字小坂西418-1	個人住宅	竈穴住居・ピット(古) 流路(古・縄)	土師器、須恵器、黒色土器 緑釉陶器、灰陶磁器	72	近藤
35 高野	高野字西溝332-1-333-1	農倉庫	土壇(古)、柱列(平)	土師器(古)、緑釉陶器(平)	73	平井
36 藤	藤614-4-614-5	個人住宅	竈穴住居・溝・土壇(縄)	土師器、黒色土器、鉄釘	74	清水
37 藤	藤字西溝621	個人住宅	柱列(縄)	黒色土器	75	清水
38 藤	藤字西溝800	個人住宅	沼沢地状溝込み・柱穴(古)、土壇	弥生土器、土師器	75	清水
39 十里	十里字北の口130-3	個人住宅	土壇(古)	土師器	76, 77	大崎
40 下野	下野地先	団地整備	円溝・方溝(古) 竈穴住居(郭～縄)、溝、土壇	須恵器、土師器、瓦、黒色土器 鉄釘、小玉、土器、陶磁器	78～81	佐伯
41 下野	下野字高田717-6	個人住宅	沼沢地・溝(古)	須恵器、土師器	82	清水
42 林	林字277-1418ほか	個人住宅	河川	土師器	83	橋本

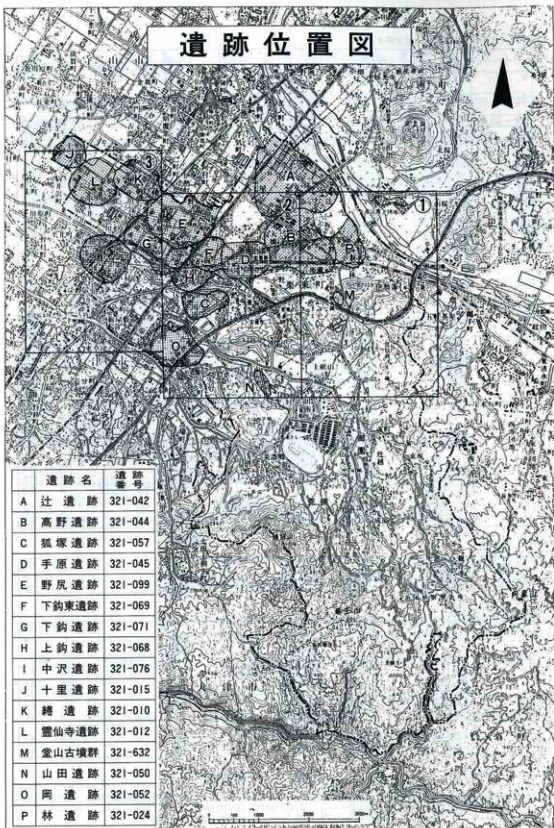
調査中(92年度～継続)

遺跡	調査地	原因
43 下野	下野字下野ノ子1227-3	倉庫建設
44 下野	下野字下野ノ子1220ほか	倉庫建設

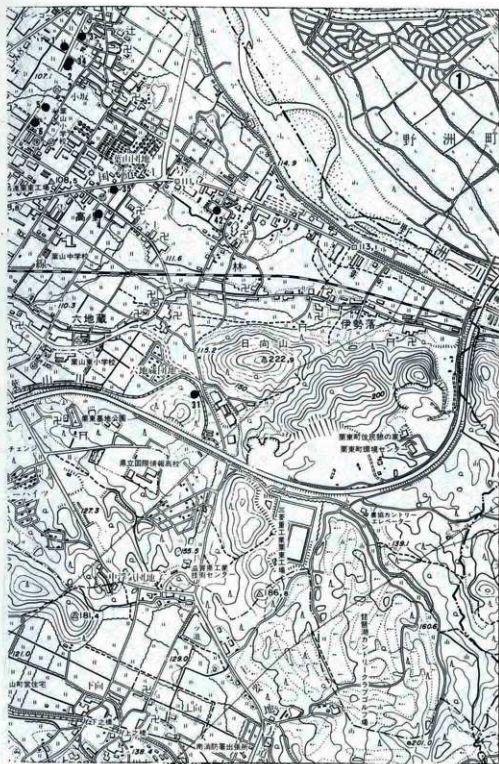
遺構等は、下記の略語を用いた。

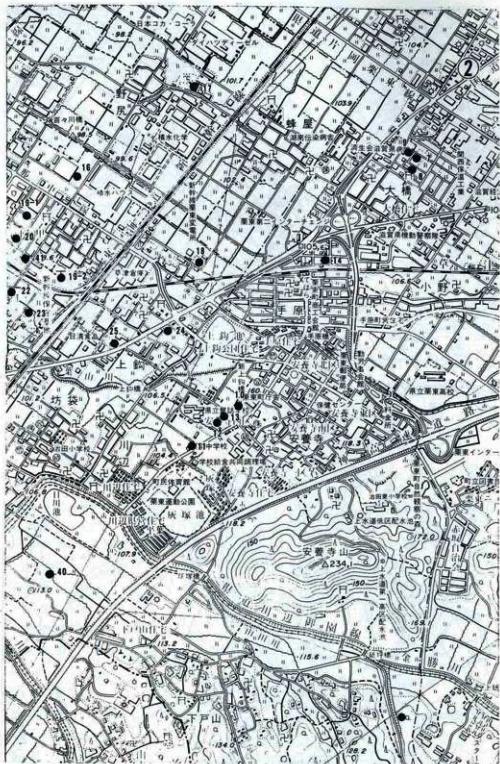
(縄)縄文時代、(弥)弥生時代、(古)古墳時代、(飛)飛鳥時代、(白)白鳳時代、(奈)奈良時代、(平)平安時代、(鎌)鎌倉時代、(室)室町時代、(江)江戸時代、(明)明治時代、また、時代の選定ができないものについては、古代・中世等と表すことがある。

遺跡位置図

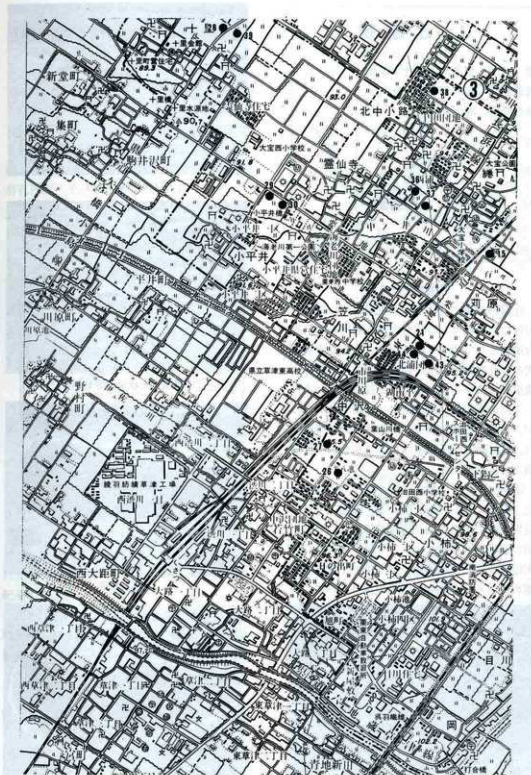


遺跡名	遺跡番号
A 辻遺跡	321-042
B 高野遺跡	321-044
C 狐塚遺跡	321-057
D 手原遺跡	321-045
E 野尻遺跡	321-099
F 下鉤東遺跡	321-069
G 下鉤遺跡	321-071
H 上鉤遺跡	321-068
I 中沢遺跡	321-076
J 十里遺跡	321-015
K 穂遺跡	321-010
L 雲仙寺遺跡	321-012
M 堂山古墳群	321-632
N 山田遺跡	321-050
O 岡遺跡	321-052
P 林遺跡	321-024





遺跡位置図② 1 : 20000



① 辻遺跡

調査地 栗東町大字辻字葉畑

調査期間 1991年7月～9月

調査面積 800㎡



調査地位置図

辻遺跡は縄文時代中期（船元Ⅲ式）以降、近世に至る様々な時代の遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも古墳時代のそれは野洲川左岸自然堤防上に立地する栗東を代表する集落地として知られている。

今回の調査地は辻遺跡では南東端にあたるが、下記する様に数棟の竪穴住居等が確認され、集落跡としての密度の高さを改めて再認識させる結果となった。

遺構はいずれも耕土・床土直下の黄灰色層上（標高：106.30m）にある。調査区全域に近世以降の多くの掘り込みが見られ、それ以前の遺構の残存度は必ずしも良好でない。竪穴住居5棟、流路2条、溝1条、土壇6基が認められる。なお近世以降の掘り込みについ



SH04（北より）



管玉出土状況（SH04）



流路02断面



調査区全景（北より）

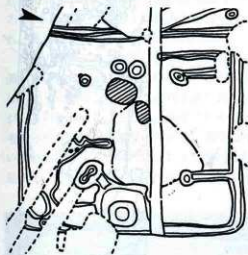


SK03（東より）

ては説明を割愛する。

竪穴住居 (SH)

全容を知り得る例は少ないが、SH04を除き、いずれも5世紀後半～6世紀前半の住居である。SH04は5.8m×5.4mの方形住居。固く踏みしまった床面ほぼ中央に地床炉を残し、東辺中央には一辺0.6mの方形土壇（貯蔵穴）を有する。上屋は4主柱構造を取る。埋土上層より多量の古式土師器の他、管玉（碧玉）、有孔円板・チップ（滑石）等も出土している。



SH04平面図

4世紀末～5世紀初頭の住居と推定される。

流路 (SR)・溝 (SD)

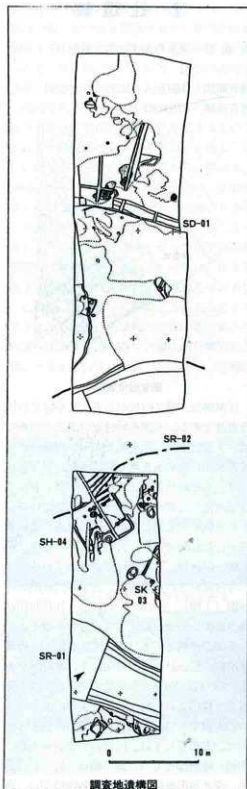
SR01・2ともに幅員8～10m、現状深さ1.5～2.0mを測る。いずれも埋土内より7世紀前半の土器が出土している。

SD01は幅1m、深さ0.6mのV字溝である。埋土内より6世紀初～同末の土器が出土している。

土壇 (SK)

円形や長方形等、様々な形状の土壇が6基認められる。時期は4～7世紀のものである。その内、SK03は径1mの円形状を呈し、深さは0.5mを測る。埋土上層より4世紀代の土器片が出土している。

(大崎)



調査地遺構図

② 辻遺跡

調査地 栗東町大字辻字小坂西417-1・418

-1

調査期間 1991年7月22日～10月25日

調査面積 約1000㎡

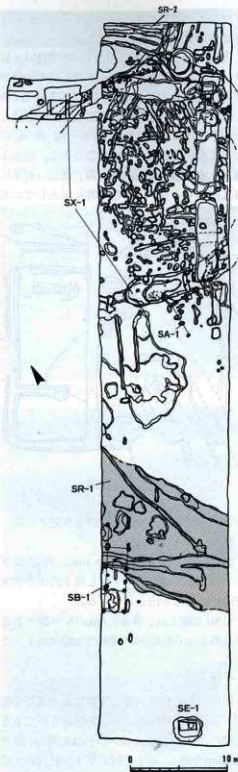


調査地位置図

辻遺跡は、縄文時代から近代にかけての複合遺跡である。本調査地付近の過去の調査では、7世紀から13世紀頃までの旧河道、ピット等が30m東の調査地で確認され、ピットからは、平安時代と考えられる「印真」もしくは「内真」と刻まれた銅印が出土している。また東側から北側にかけては、県道の事前調査が行なわれており、古墳時代から近代に至る溝、旧河道、井戸等が確認されている。

今回確認された遺構は、古墳時代前期から後期（Ⅰ期）、平安時代（Ⅱ期）、江戸時代以降（Ⅲ期）の3時期に大きく分けられる。

Ⅰ期の遺構としては、旧河道（SR-1）、周溝状遺構（SX-1）、櫛列（SA-1、2）等がある。SR-1は、南東から東北方向に延びる旧河道で、検出された幅10m強、深さ約0.8～1.0mの規模をもつ。SX-1は、古墳の周溝と考えられ、方形もしくは、円形のプランをもち、南側に陸橋部をもつ。溝の幅は、約1.4～2.4m、深さ約0.6～0.7m強である。時期は、溝



調査地遺構図

の底付近から出土した須恵器より、5世紀後半頃のものと考えられる。この他、SX-1南辺と東辺に接するように、柵列が確認されている。南辺方向に存在する柵(SA-1)は、L字状につくられた柵で、建物になる可能性も残している。規模は、東西約2.4m(2間)、南北約3.6m(2間)である。東辺付近に存在する柵(SA-2)は、長さ約3m(3間)である。

II期の遺構としては、旧河道の一部と思われる遺構(SR-2)と、掘立柱建物(SB-1)がある。SB-1は、4間×2間以上の建物と思われる、柱間は、ほぼ2.2mの等間隔である。

III期の遺構には、井戸、耕作痕と思われる溝、ピット、土採り土壌等がある。井戸(SE)は、完全に残存していたものは1基しかないが、井戸をつくろうとして、途中でやめたと考えられる土壌が2基認められる。掘り方は、いずれも約2～3mの円形もしくは楕円形を呈する。調査区南隅で確認されたSE-1は、大

きさ約2.8×2.6m、深さ約3.2mである。井戸枠は、幅の狭い板を何枚か並べて長方形に組み、その中央を板でしきっている部分のみられた。また井戸枠の下には、円形の曲物が存在していた。時期は、出土遺物より江戸から明治時代にかけてのものと考えられる。土採り土壌は、平面形が長方形を呈するもので、大きさが約8.5×2.2mの大きめのものと、約4.4×0.8mの小さめのものがある。深さは、約50～70cmである。これらの土壌は、断面観察から、土を採った後に、別の場所から運んできた土や砂によって埋め戻していることが伺える。その際に、不用となった瓦や陶磁器類等と一緒に廃棄している。時期は、出土遺物より、江戸時代後期のものと考えられる。

この他、遺構として明確にとらえることができなかったが、古墳時代以降の地山面から約50～60cm下げた部分で、縄文時代晩期の土器が少量出土している。(近藤)



作業風景



調査区北東から南西方向をみる



江戸時代以降の土壌群



調査区南から北方向をみる

③ 辻遺跡

調査地 栗東町西出401・402・403・404
調査期間 1991年12月9日～1992年5月1日
調査面積 約1100m²



調査地位置図

辻遺跡は、野洲川左岸地域における古墳時代の集落として、高野・岩畑遺跡と共によく知られている。また、中世から近世を中心に鋳物師の拠点として栄えた場所である。

鋳物関連の調査では、鋳造炉、鋳込み用の土壌と思われるものが、これまでに一部確認されていたが、鋳造工場全体としては、把握できていないのが現状であった。しかし文献史料においては、明治5年に太田猪三郎氏が作成したとされる「鋳物職執業之図」や工場の平面図、さらに、製品についての文献もいくつに残っており、鋳造の歴史を解明するひとつの手がかりとなっている。

本調査地は、太田猪三郎氏の工場が存在していたと推定されている場所の北側隣に当たり、猪三郎氏の工場が存在していた時期とほぼ同時期と考える遺構と、18世紀代の遺構(上層遺構)、さらにその下層から、古墳時代から平安時代にかけての遺構(下層遺構)を確認することができた。

上層遺構には、鋳物工場の一部と思われる建物および柵列、井戸、貯水施設、土壌、区画溝等がある。土壌には、ノコ(スラグ)や不用となった鋳型等を捨てるための土壌や、石と漆喰でつくられた水溜用と思われる土壌

がある。また、溝の中に石や瓦によって特別な施設を構築した部分があり、その上に堆積している土の最上部に、何箇所か焼土が溜まっている部分がみられた。出土遺物には、鋳型(梵鐘、弾丸、釜等)、土製人形、陶磁器、銭貨等がある。

下層遺構は、上層から約30～40cm下げると確認できる。平安時代と思われるビッドがわずかに存在する以外は、ほとんど5～6世紀を中心とする古墳時代の遺構である。古墳時代の遺構には、竪穴住居10棟をはじめ、土壇、流路、溝、耕作痕状連続溝等がある。竪穴住居は、方形プランをもつもので、カマドをもち、その右隅に貯蔵穴と思われる土壇をもつパターンが主流である。大きさは一辺4m前後のものが多い。耕作痕状の連続した溝は、水路と思われる溝と連結し、3～4本単位ぐらいで段状になっている部分がみられる。流路は、現今井川の前身と思われるもので、東南方向から北西方向に延びる。

今回の調査における大きな成果は、「辻鋳物師」に関連する遺構の検出であり、文献と発掘史料の接点がみられたことである。

前述した太田猪三郎工場の図と今回検出した遺構は、溝の位置関係から判断すると、調査区南側の道をはさんですぐ隣の位置関係にあったことが想定できる。また注目すべき遺物に弾丸の鋳型があるが、幕末に記された弾丸献上目録が残っているのも、このことから太田猪三郎との関係が伺える。さらに猪三郎の工場が、地震によって崩壊し、工場を移動したという記事も残っているのも、そのときの工場が今回検出した工場跡であった可能性も残している。

(近藤)

注・参考文献

①辻鋳物師に関する文献史料について、井上優氏から多大なる御教示、御協力を得た。

②井上優・佐々木進「鋳金の美——辻の鋳物師たち——」 栗東歴史民俗博物館 1991



トレンチ1・水溜土壌と石垣



トレンチ1・弾丸鋳型出土状況



トレンチ1下層遺構（旧河道ほか）



トレンチ4下層遺構（竪穴住居群）



トレンチ1を上空からみる

④ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野イバ立324-1

調査期間 1991年3月6日～6月15日

調査面積 約1030m²

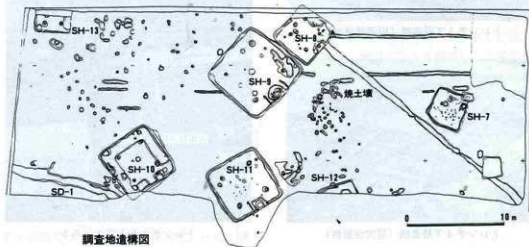


調査地位位置図

高野遺跡は、古墳時代前期を中心とする集落として周知されている。イバ立付近の調査では、過去6次に渡る調査が行なわれており、旧河道を挟んで、古墳時代前期から後期の竪穴住居をはじめ、墓と考えられる方形周溝状の遺構が2基確認されている。古墳時代以外

では、15世紀頃と考えられる区画溝や、時期不明の掘立柱建物、焼土壇が確認されている。

今回確認された遺構は、古墳時代の竪穴住居、溝、ピットの他、時期不明の焼土壇、ピット、溝がある。竪穴住居(SH)は、SH-13を除いて全て古墳時代前期に含まれる。規模、形態等の特徴については表1に示した。前期の竪穴住居の共通点は、南辺に貯蔵穴と考えられている土壇を付属している点にあり、南辺でも、中央付近に付属するものと、東寄りに付属するものがある。また、SH-10はベット状遺構をもち、近江における出土例では、高野遺跡の隣に存在する岩畑遺跡、野洲町野洲川左岸遺跡、下々塚遺跡等に類似がある。竪穴住居の廃絶後は、2次利用としてSH-10では、何かを焼いていたように厚く焼土が堆積しており、SH-11、12、13を除く竪穴住居では、上層から下層まで、古式土師器が多量に出土し、不用になった土師器等の廃棄場として利用していたことが伺える。古墳時代後期の遺構は、SH-13の他にSD-1がある。SD-1は、南東から北西方向に延びる溝で、幅約0.8～1.2m、深さ0.1～0.2mである。溝の中からは、多量の須恵器、土師器が出土した。これらの遺物よりSD-1の時期は、7世紀前半頃のものと考えられる。(近藤)



調査地遺構図

遺構名	平面形	規模(m)	深さ(m)	壁溝	炉	貯蔵穴の位置
SH-7	不整形方形	3.8×3.9	33~40	ある	ある	南辺東寄り
SH-8	方形	4.7×4.8	25~30	ある	ある	南辺中央
SH-9	方形	7.5×7.5	30~37	ある	ある	南辺中央
SH-10	方形	6×6	40~50	ある	ある	南辺東寄り
SH-11	方形	6.2×6.5	25~30	ある	ある	南辺中央
SH-12	方形	4×1.6以上	25~30	ある	?	?
SH-13	方形	3.8×2.4以上	7~12	ある	?	北西隅

表1 壁穴住居の規模と付属施設



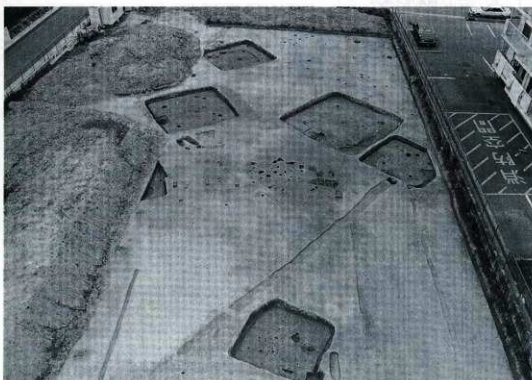
SH-7



SH-10



SD-1 遺物出土状況



調査区南東から北西方向をみる

⑤ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字下戸別当572

調査期間 1991年4月25日～6月29日

調査面積 840㎡



調査地位置図



SH-1



SH-1 貯蔵穴

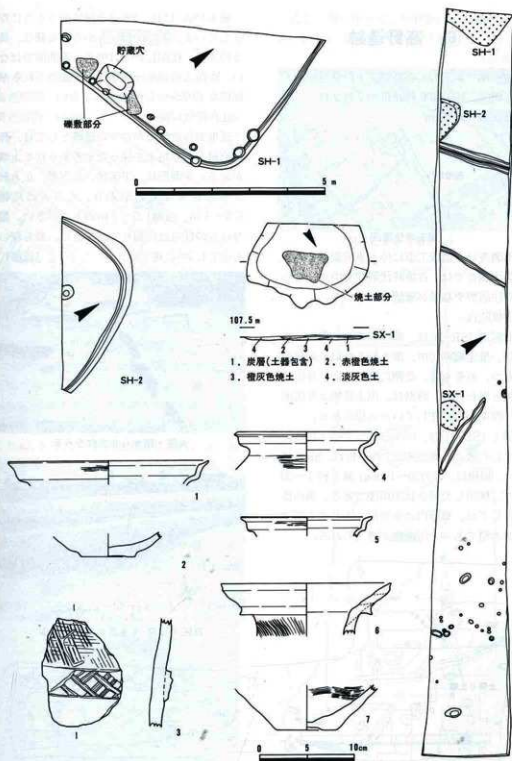
高野遺跡は、縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。そして主に古墳時代前期を中心とした竪穴式住居群や方形周溝を持つ墳墓群が確認されている。今回の調査では古墳時代初頭の竪穴式住居跡2棟、土壌の他に中世の溝・土壌・柱穴などを検出した。

SH-1は、推定 6×6 mを測る方形の竪穴式住居跡で深さは遺構検出面から約0.55 mを測る。壁帯溝は床面から約0.05 mで、柱穴は床面には存在せず、壁に接して柱穴が掘られておりSH-2など通常の竪穴式住居とは異なる構造である。また、南壁の西寄りには長さ1 m、幅0.7 m深さ0.61 mの貯蔵穴と思われる土壌が存在する。貯蔵穴の両脇には直径1～3 cmの小礫を敷き詰めた部分がかったが、その意味は不明である。

SH-2は隅丸方形の竪穴式住居で北端部のみの検出である。深さは遺構検出面から0.5 mで壁帯溝は床面から約0.1 mを測る。柱穴は、4本柱と思われる支柱穴のうち1本を確認できた。柱の掘り方は直径約0.4 m、深さ0.77 m、柱は推定0.15 mを測る。

SX-1は、最大幅3.2 mを測る不整形の土壌で、深さは最深部で0.1 mである。その中央部には硬く焼き締まった焼土部分があり、その上層には土器片を包含した炭層が認められた。その土壌の性格は、削平によりそのほとんどが失われているため断定はできないが、土器焼成土壌の可能性が考えられるのではなからうか。

遺物には、古墳時代初頭の甕・壺・高杯・手焙形土器、中世では溝から黒色土器片が出土した。図示したのはすべてSH-1出土遺物である。1・2・4・5は受け口状口縁をもつ甕の口縁部と底部で、6・7は壺である。3は不明土製品で、同様のものが隣接地の調査で、庄内期の竪穴式住居跡から出土している(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会「高野遺跡発掘調査報告書」1986)。(佐伯)



SH-1 出土遺物実測図

調査地遺構図 (S=1/400)

⑥ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字下戸別当579

調査期間 1991年6月28日～7月2日

調査面積 約450㎡



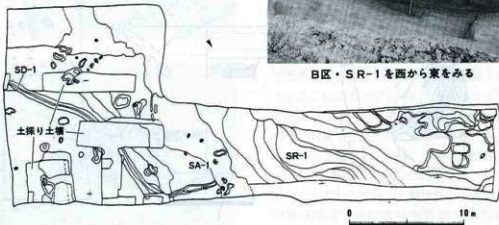
調査地位置図

本調査は、造成工事に伴う事前調査である。過去の調査では、古墳時代前期を中心とする竪穴住居群や墓域が確認されている。

〈古墳時代〉

旧河道 (SR-1) は、南から北西へ向かって延び、推定幅約10m、深さ約2m以上の規模をもつ、おそらく、北側に流れる中ノ井川の支流と思われる。時期は、出土遺物より古墳時代前期から存在していたと思われる。

溝1 (SD-1) は、南から北へくの字状にカーブした後に、調査区端で西へ折れ、SR-1に続く。規模は、幅約30～100cm、深さ約5～20cmで、検出した長さは20m強である。溝の性格としては、集落内に水を出し入れする農業用の水路であった可能性が考えられる。



調査地遺構図

柵1 (SA-1) は、SR-1の肩に沿うように存在している。4つのビットからなる柵は、長さ約5m、柱間1.7～2.1mで、等間隔ではない。東西方向にも一部ビットが認められるが、同様なものかもしれない。

〈江戸時代以降〉

近世から近代にかけての遺構としては、瓦の原料となる粘土を採ったと考えられる土墳がある。平面形は、T字状、長方形、正方形とさまざまなものがあり、大きさは長軸7.5～8m、短軸1.5～2mのものが多い。掘り込みの仕方は段掘りで、深さは、最も深いもので1.5mに達する。(近藤)



A区・南から北方向をみる



B区・SR-1を西から東をみる

⑦ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目298

調査期間 1991年8月19日～9月5日

調査面積 164m²



調査地位置図

本調査では平安時代の時期に属する掘立柱建物2棟、ピット、溝を確認した。

建物1は梁行2間、桁行5間(約46m²)の規模をもつ。柱穴はおおむね20cmを測り、柱の抜取穴には焼土、炭化物が含まれる。妻柱筋の方位はN-32°-E。9世紀代の時期とみられる。また、P-13の柱材の抜取穴には長さ4cmまでの土鍮25点が埋納されていた。この建物は焼失家屋である可能性が高く、埋納された土鍮は祭祀に関するものと考えられよう。

建物2は建物1がなくなった後に建てられたもので、梁行2間、桁行2間以上(約25m²以上)の規模をもつ。柱穴はおおむね15cm程度。桁行の方位はN-38°-Eにとり、建物1



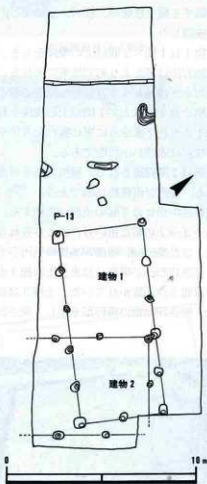
柱穴

に比し、東に振れる。10世紀代の時期とみられ、回転土師器碗などが少量出土する。

(清水)



調査区全景(南から)



調査地遺構図

⑧ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目318・319

調査期間 1991年9月2日～9月12日

調査面積 170m²



調査地位置図

本調査では平安時代末期から鎌倉時代の時期に属する掘立柱建物、柱列、土壇などの遺構を確認した。

建物1は1間×2間以上の規模をもち、建物の軸方位は磁北より約33度東に振れる。柱穴の大きさはおよそ直径15cm程度である。

建物2は4間以上×1間以上の規模を有し建物1より約2度さらに東に振れた方位を示す。柱穴は直径15cm程度である。

柱列は2間確認される。建物である可能性がある。柱穴は直径約15cmである。

調査区中央には3基の土壇が重複する。土壇4→3→2の順に用いられたとみられる。土壇4は長径95cm、短径70cm程の楕円形を呈す。深さ約25cmの壇底には黒色土器碗3点、土師器皿2点が置かれていた。土壇3は長径90cm、短径70cm程の楕円形を呈し、深さ25cm



調査区全景 (西から)

を測る。

時期については土壇4が12世紀後半頃、建物1及び2が12世紀後半から13世紀初頭頃とみられる。

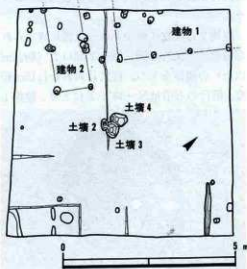
その他の遺構については時期を判断するに足る土器等に恵まれなかった。(清水)



土壇2～4



土器出土状況 (土壇4内)



調査地遺構図

⑨ 高野遺跡

調査地 栗東町大橋4丁目295-2他

調査期間 1991年9月13日～10月3日

調査面積 80㎡



調査地位置図

本調査では自然流路、掘立柱建物、溝、土塀を確認した。

自然流路は1990年に実施した隣地調査でも確認されたもので幅9m以上、深さ90cmほどを測る。下層は砂や小礫が堆積し、上層には粘質土が堆積する。遺物の出土量は少なく、回転台土師器碗片などから9世紀～10世紀代に埋没した流路跡と解される。

掘立柱建物は一部分の確認にとどまったが1間以上×2間以上の規模をもつ。柱穴は10乃至15cm程で、深さ30cm程が遺存した。柱穴や掘り方内からは数点の土器片が出土する。4世紀代の甕口縁部の細片1点がふくまれて

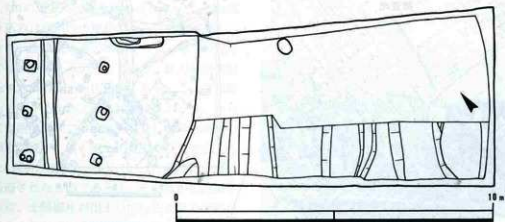
いる。隣地調査では時期不明の竪穴式住居1棟が確認されており、竪穴式住居と掘立柱建物をこの時期の遺構とみなすことも考えうるが、現時点では確証に欠く。今後の周辺調査に期待したい。(清水)



流路調査状況(東から)



掘立柱建物(北東から)



調査地遺構図

⑩ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字安養寺7丁目593

調査期間 1991年3月26日～6月24日

調査面積 1,180㎡

狐塚遺跡は野洲川が主として形成する複合扇状地上にあり、北側には葉山川・南に金勝川が流れている。また、東側には孤立峰の安養寺山があり、狐塚遺跡寄りの山麓には有力な中期古墳が展開する。

本調査区は狐塚遺跡の東端にあたる。県下最大の帆立貝式古墳の椿山古墳は、調査地の東約150mの地点にある。また、安養寺共有文書にみられる「けつね(狐)塚」も付近に存在していたと考えられる。

今回の調査でみつかった遺構は、弥生時代末から中世に至る時期のもので、4期に区別できる。以下、時期別に概略を述べる。

I期 弥生時代末

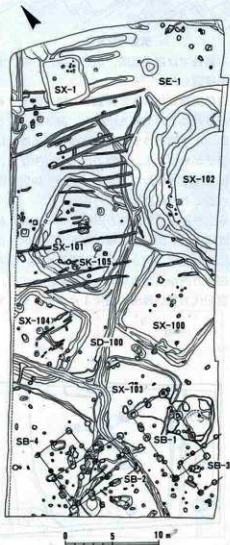
土壌(SK-105)が該当する。径約80cmの円



作業風景



調査地位置図



調査地遺構図

形で、上層に完形の甕・甕・鉢が埋まっていた。本調査区からはほかに同時期に比定できる遺構はない。

II期 古墳時代中期

円墳1基、方墳5基が検出されている。円墳(SX-102)は径が約12mに復元できる。周濠の幅は約5m、検出面からの深さは約40~60cmである。墳丘部分は削平されている。葺石はもたない。周濠には、墳丘から落ち込んだような状態で、円筒埴輪・朝顔形埴輪が出土している。埴輪はすべて軟質で、無黒斑である。調整手法には幾つかのパターンがあるが、川西編年IV期に相当する時期である。以上の埴輪は墳丘上にある程度間隔をおいて立て並べられていたと考えられる。周濠内の遺物にはほかに須恵器・土師器・紡錘車がある。

方墳は、規模が約7×8mのやや長方形を呈するもので、周溝の幅は1.5mで、周溝の断面形態はV字形である。SX-105以外は軸方位がすべて北西—南東方向である。今回特に注目されるのが、最も残存状態がよかったSX-101である。北東側の周溝で東側コーナーに近接する地点では、土師器甕・高杯とともに、瑪瑙製勾玉・緑泥片岩製紡錘車・溶結凝灰岩製算盤玉⁽¹⁾・ガラスおよび滑石製小玉計77個が出土している。これらの遺物が集中していた地点には地山を掘りこんで幅0.8m、長さ1.7mの長方形の掘り込みがみられる。この掘り込みは周溝内の埋葬である可能性がある。また、南東側周溝の東側コーナー寄りの地点では鉄刀が1点出土している。鉄刀は全長84cmで地山近くから出土しており、ここでは地山が掘り込まれている状況はなかった。さらに南西側周溝では底部を穿孔したほぼ完形の須恵器甕が、溝の底に倒立した状態で出土した。以上の遺物からSX-101は古墳時代中期に築造されたものであろう。そのほかの方墳からは、土師器片が出土しているだけで年代を考えることのできる遺物はみなかったが、SX

-105を除くほかの4基は軸方位・規模・埋土が類似しており、ほぼ同じ時期に次々と築造されたものと考えられる。また、SX-102で多量に出土した埴輪は、方墳では混入と考えられるもの以外ほとんど出土せず、円墳・方墳間の格差が伺える。SX-102は上層まで埋まったのが奈良時代まで下がるので、SX-100との切り合いは不明だが、SX-102が後に作られた可能性が高い。

III期 白鳳〜奈良時代

掘立柱建物4棟、溝、井戸などが出土している。掘立柱建物はいずれも2×3間で、2時期にわたっており、柱穴の形態・埋土の類似からSB-1,2およびSB-3,4が同時に存在していたと考えられる。溝(SD-100)は古墳周溝埋没後にやや凹みになったところを掘削したものである。南西よりではSB-2に切られていることや、白鳳時代に遡る遺物が出土することからやや早目に埋まったらしい。東側では円墳埋没後の凹地にそっている。円墳上層からも当該時期の遺物が多く含まれる。ほかに調査区北東よりでは素掘りの井戸(SE-1)、方形の遺構(SX-1)がある。

IV期 中世

耕作痕から黒色土器が出土した。

(雨森)

注① 石製品の材質について、肥塚隆保氏の御教示を得た。



現地説明会風景



古墳群全景



S D-100遺物出土状況



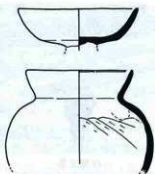
S K-105



SX-102朝顔形埴輪出土状況



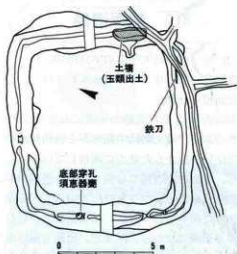
掘立柱建物群



S X-101周溝内の土壌出土 (S = 1/4)



SX-101出土玉類・紡錘車



SX-101 遺物出土地点



SX-101底部穿孔須恵器出土状況



S X-101 (南よりみる)



SX-101鉄刀出土状況



SX-101玉類出土状況

⑪ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字川辺字島田196-1

調査期間 1992年7月29日～8月2日

調査面積 180㎡

本調査地は、狐塚遺跡の東端にあたり、1989年度の調査で縄文時代中期末から後期初頭の竪穴住居が出土した地点に隣接している。しかし、今回の調査区では縄文時代の遺構面が、縄文時代晩期の遺物を含む幅20m以上の流路によって攪乱されており、隣接調査区からひろがる遺構はなかった。また、周囲で流路堆積土をベースに形成されている、平安時代の建物跡はみられず、溝・土壌等の検出と、中世信楽焼・瓦質羽釜・土師器の出土にとどまった。

(雨森)



調査地位置図



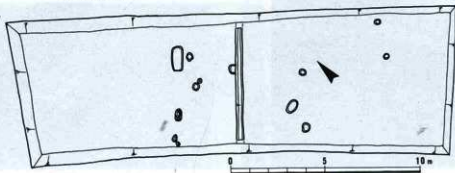
作業風景



第1遺構面全景 (東南から)



第2遺構面全景 (東南から)



第1遺構面遺構図

⑫ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字安養寺7丁目618・619

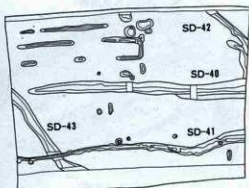
調査期間 1991年8月21日～9月24日

調査面積 690㎡

本調査区は帆立貝式古墳がみつかった⑬調査区の西側に隣接している。第一遺構面では、南北方向の溝（SD-42、43）・条里方向の溝、ピットがみついている。南北方向の溝からは古墳時代前半期の土師器が出土しており、当該期に埋没したものと考えられる。条里方向の溝のうち、砂を埋土とするSD-41からは埴輪片・ガラス小玉が出土しているが近接する古墳からの流入であろう。第一遺構面は暗褐色粘質土から成るが、これは近辺に広がる沼沢地の堆積層と考えられ、縄文時代中期（船元式）の土器を包含している。この層の下で明青灰色からなる第二遺構面では、風倒木痕が発見されている。（雨森）



調査地位置図



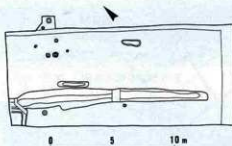
SD-43出土遺物 (S=1/4)



第1遺構面全景（北西から）



第2遺構面全景（北西から）



第1遺構面遺構図

⑬ 狐塚遺跡

調査地 栗東町大字安養寺7丁目616-1
調査期間 1991年10月8日～1992年1月31日
調査面積 890㎡

本調査区は、⑩調査区の西南約100mの地点である。東側には全長99mの帆立貝式古墳である椿山古墳や、全長75mの前方後円墳である大塚越古墳といった、首長墓クラスの古墳が近接している。

今回の調査では、木製品を出土した帆立貝式古墳をはじめとして、方墳2基、掘立柱建物2棟等が検出された。

帆立貝式古墳(SX-1)は、墳丘を削平されており、水田下にあったためこれまでに周知されていなかった古墳で、前方部および後円部の一部が検出された。これにより復元された墳丘は、全長32.5m、後円部径26m、前方部幅12.5mである。墳丘裾部には葦石がみられた。この葦石は南・北くびれ部では丁寧に

葦かれ、後円部および前方部では粗く葦かれている。後円部の葦石は特にまばらであるが、周濠内の転落石が後円部付近に多く、葦石の崩落が著しかったと考えられる。

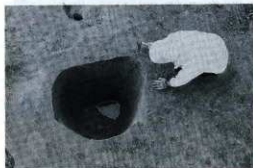
周濠は、幅2.5～8m、検出面からの深さは約0.5mである。周濠底は平らであるが、一部不整形の凹みがある。前方部側の周濠底には柱穴が2個みついている。周濠の埋土は上層が中世までの土器を含む褐色粘質砂質土層、中・下層が遺物をあまり含まない粘質土層、最下層が暗茶褐色腐植土層で多くの木製品が出土した層である。

木製品には、蓋形・鳥形木製品といった、「木製の埴輪」といわれるもの、板材・丸木材・鋤・棒状木製品等がある。棒状木製品の出土数は多く、なかには長さ4mのものや、先端を加工するものがある。

蓋形木製品は、直径が20cm程度の小型のものと、30～40cmの大型のものがある。大型のものの中にも、頂部が平らなもの・頂部が丸く突起がつくもの・頂部が丸くて突起のつか



調査地位置図



おとし穴状遺構



SX-2 (方墳)

ないものがある。鳥形木製品は、首・胴部のみ出土で、復元すると胴部の下に羽根がつき、飛んでいる鳥を上から見た形をとるものである。長さは現存長で64cmという大型のものである。「木製の埴輪」の軸となり得るような丸太材は非常に少ない。

木製品の出土地点は、前方部西寄りのコーナー付近に集まっている。その他の場所には、蓋形木製品、棒状木製品が散在している。

その他の遺物には、円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪（たち飾り部分）がある。円筒埴輪のうち約半数が須恵質のもの、ほかは軟質で無黒斑のものである。また、須恵器・土師器も出土しているが、明確に古墳に伴うと断定し得ないものである。周濠上層には灰釉陶器・黒色土器があり、周濠の最終的な埋没は鎌倉時代頃と考えられる。

調査区内の古墳は、ほかに方墳2基（SX-2、SX-3）がある。規模はSX-2が約9×11

m、周濠の幅は1～2mである。SX-3の1辺は約9mである。両者とも溝内からほとんど遺物が出土していないが、SX-2に切られるSB-2の柱穴に須恵器が含まれていたことから、SX-2は古墳時代後半で、SX-1より古い時期と考えられる。

掘立柱建物のうち先述したSB-1は、2間×2間で東柱をもつものである。またSB-2は、2間×1間以上で、奈良時代以降のものと考えられる。

今回の調査で、安養寺山西麓一帯の古墳群の広がりが確認できた。また、同古墳群で最も新しい時期の首長墓クラスの帆立貝式古墳が明らかになった。その周濠には、「木製の埴輪」や多くの木製品が出土しており、古墳における葬送儀礼と、その地方的展開を考えるうえで、貴重な資料が得られた。（雨森）



SX-1 作業風景



蓋形木製品・鳥形木製品出土状況



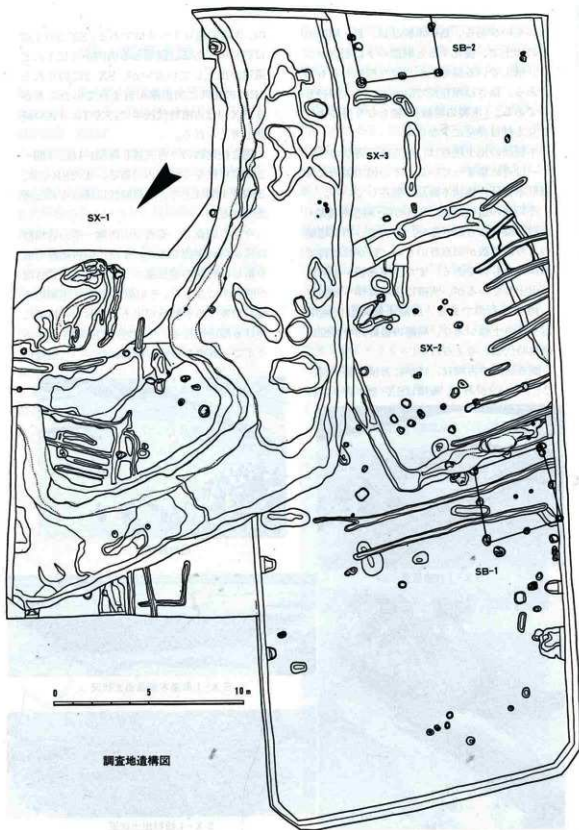
現地説明会



SX-1 周濠木製品出土状況



SX-1 板材出土状況





SX-1木製品出土状況



SX-1北側葺石検出状況



調査区全景

⑭ 手原遺跡

調査地 栗東町大字手原 7丁目833-834

調査期間 1991年1月～3月

調査面積 650㎡



調査地位置図

手原遺跡は古瓦の出土や正南北方位の古地割の存在から、廃寺跡や官衙跡として周知されてきた遺跡である。

今回の調査でも9～14世紀の掘立柱建物(SB)や区画溝(SD)等が確認されている。

従前の調査成果に従い、これらをⅡ・Ⅲ期の2期に分け、若干の説明を加える。

Ⅱ期：本調査では9世紀中葉～10世紀前半の遺構が見られる。SB7棟、SD1条の他、井戸跡(SX05)がある。

SBは下記の様に3小期に細分される。

○a小期：SB01,02,04

○b小期：SB01,03,05,06

○c小期：SB07

SDはa～c小期、井戸はa・b小期に各々対応する。



SB01 (北より)



SD02中央部 (東より)



SD01・02 (北より)



SB01 (西より)



SX05 (井戸)

a・b小期の遺構配置は北面に庇を付す東西棟の建物(SB01)を主屋とすれば、脇屋、後屋、倉庫が整然と配された屋敷地として復元が可能である。

Ⅲ期：本調査では13～14世紀の遺構が見られる。SB5棟やSD(区画溝)の他、方形遺構(SX01～03)がある。

SBは全容を知り得る例は少ないが、重複関係や方位から、3小期程度の細分も可能である。その内SB09は2面庇の東西棟の建物で、東面に1柱間の張り出しを有する。

区画溝(SD02)は中央部に掘り残しが見られ、出入口様の体裁を備えている。

SX01は2m四方、02・03は3m×2mの浅い掘り込み。性格は明瞭でないが、石塊や焼土片が多量に出土している。

出土遺物の大半は須恵器や黒色土器が占めるが、古墳時代前期の銅鏡片(SD01)や室町時代の青銅製懸け仏片も含まれている。

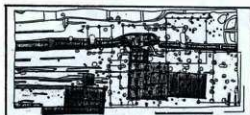
(大崎)



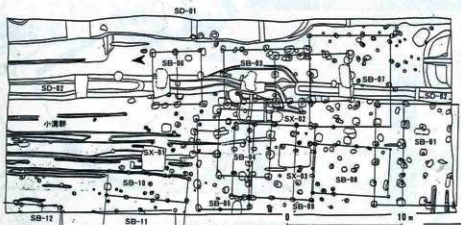
SB04柱穴・SB07柱穴
SD02上層各出土土器



Ⅱ期遺構配置



Ⅲ期遺構配置



調査地遺構図

⑮ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字穂字百々370他

調査期間 1991年4月1日～1992年3月31日

調査面積 10,500㎡

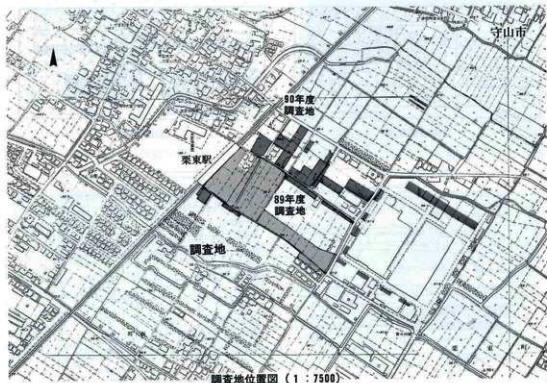
野尻遺跡は、標高1200m程の鈴鹿山系から源を発し、琵琶湖へ西流する野洲川が形成した標高100m程を潤る扇状地の扇端と氾濫原との境に位置する。過去の調査からは、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代後期から古墳時代であることが判明している。また、88年度の調査では一辺約50m四方の方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見しており、当時の古代豪族を知るうえで重要な知見を得た。

今回の調査は、J R東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第三期工事に伴う発掘調査である。調査対象面積は、89年度調査地の南接部分の約19,200㎡である。

調査にあたっては、対象地に合わせ1～25のトレンチを設定した。また、対象地形の制約からトレンチによっては、それぞれ東・西・南・北・中央部に分け、2-Eトレンチ・2-Wトレンチ・2-Cトレンチとした。

以下、その概要を報告することとするが、現在、整理作業が未了であることから、今回は略報とし、その詳細については、また期を改め報告することとする。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると次の4層である。上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、奈良時代及び中世期の遺物を包含する層厚20cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして、弥生時代末から古墳時代の遺物を包含する茶褐色粘質土系沼沢地堆積土層と黄褐色粘質土層・灰色系粘土・砂礫の河川氾濫原の地山層である。遺構の検出にあたっては、各遺構面の遺存状況に合わせて行ったが、そのほとんどは後世の削平を受けているため、前述の各地山層上面で検出した。



遺構 検出した遺構は、縄文時代晩期及び古墳時代初めの旧河道、平安時代末から鎌倉時代の掘立柱建物・井戸・溝・土壇・耕作痕のほか、近世期の井戸状遺構・暗渠排水路などである。また、今年度も地震跡を検出した。ここでは、主なトレンチの主要遺構についてその概要をのべることにする。

(9トレンチ)

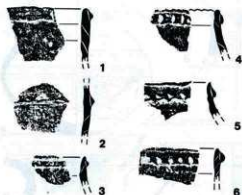
本トレンチでは、近世期の井戸状遺構群の著しい攪乱を全面に受けていたことから、断ち割り調査を行い下層遺構遺存状況の確認に努めた。地震跡の断層と、縄文時代晩期及び古墳時代初めの旧河道の発見はこれによる。

断層は東西方向のもので、昨年度の調査で発見した噴砂の方向と一致する。その規模は、土層の段差が10cm程で、深さは約2.6mまで確認した。それ以上は安全性の問題から断念せざるをえなかった。この地震跡については、通産省地質調査所 寒川 旭氏の指導を受け調査することができた。



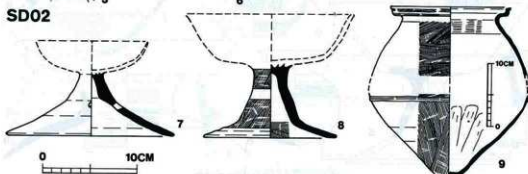
9 トレンチ断層断ち割り状況

SD01



9 トレンチSD02鑄出土状況

SD02



9 トレンチ SD01・SD02土器実測図

SD01 現地表下1.5m程で検出した縄文時代晩期の旧河道である。埋め土は、植物遺体を含む暗灰色粘土。滞水層のため、植物遺体の残りはよく、多量の自然木・葉・種子が良好な状態で遺存していた。遺物的にはそのほとんどがこれら自然遺体である。このほかに少量の土器片と鉢状木製品片が出土している。土器は、滋賀里IV式から長原式のものである。

SD02・03 SD01の北側で検出した古墳時代初めの旧河道である。埋め土は厚層1m程の灰色系の砂層・砂質土層・粘土層の互層からなる河川堆積層である。遺物は主として砂層部分より出土した。

SD02は、庄内式併行期から布留式併行期の土器片及び、木製品の鋤などが出土した。SD03は、布留式併行期の土器が出土した。いずれも破片が多いが、摩滅は少なく残りはよい。また、両者とも弥生土器V様式の土器片・織機などの木製品や加工木なども少量ながら出土している。

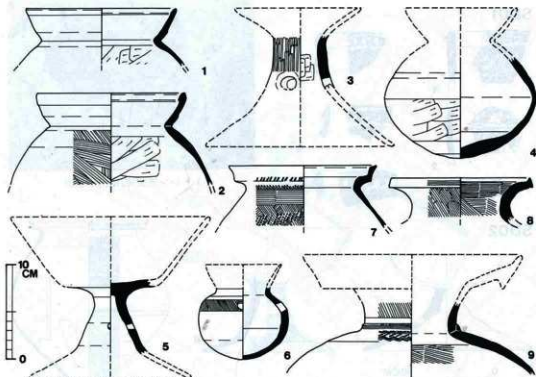
(10トレンチ)

現代耕作土直下の黄褐色系粘質土の地山層において、中世期から近世期にわたる遺構を検出した。

SK01 鎌倉時代初めの不定形土壌である。長辺2.3m・短辺1.4m・深さ15cm程を測る。埋め土からは、古墳時代から鎌倉時代までの土器が一括で出土した。いずれも細片であり、摩滅が著しい二次堆積のものである。また、若干の獣骨片も出土している。

井戸状遺構 今年度も調査地全域で確認した。総数64基。特に本トレンチでは、現土地区画に対して規格性を持ち位置する。

この井戸状遺構は、初年度より総数157基を検出した。調査地全域で概ね認められるが、その分布・配置状況は地区によって異なる。集中する地区では規則正しく配置し、それ以外の地区ではその配置は疎らである。これは、調査条件の差異ではなく、井戸状遺構群の実態として考えてよい。



9 トレンチ SD03土器実測図

(17トレンチ)

本トレンチでは、現代耕作土層直下の黄褐色粘質土の地山面において、平安時代末から鎌倉時代初めの掘立柱建物・土壇・溝・耕作痕などを検出した。

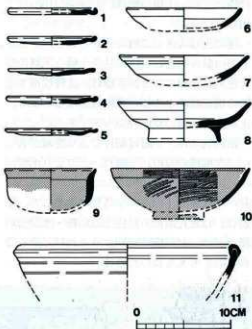
SB10・14 SB10は4間×1間以上、SB14は5間×1間の東西棟の建物である。柱間距離は2.1mから2.4m程を測る。柱穴掘り方には、SB10は南側への、SB14は北側への柱抜き取り痕跡が認められた。SB10の柱穴掘り方は、基本的に長辺50cm・短辺40cm・深さ70cm程を測る隅丸方形のものである。

時代的には、SB10の柱穴出土の土器から平安時代末から鎌倉時代初めのものである。また、その規模・方位からSB10・SB14は併存していたものと考えられる。

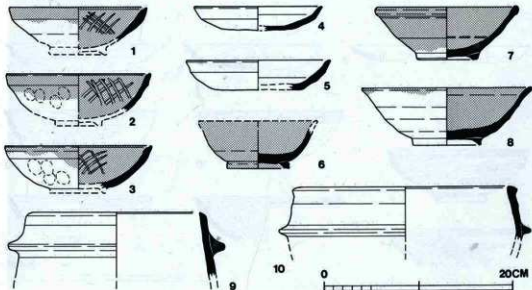
SK05 一辺3m、深さ20cm程を測る大型の方形土壇である。ほぼ中央で東西40cm・南北25cm・深さ40cm程の長方形掘り方の土壇を検出した。土壇内より黒色土器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶器が出土した。

本トレンチでは、これらのほかに中世期の溝・土壇などを検出したが、相互間の有機的な関係はつかめなかった。

本トレンチと後述する24-Sトレンチの遺構分布状況は、調査地域における中世の村落の分布状況といえそうである。つまり、生産地内に分散して2～3棟の建物と関連施設の溝・土壇等からなるいわゆる散村と呼ばれるものである。



10トレンチ SK01土器実測図



17トレンチ SK05土器実測図

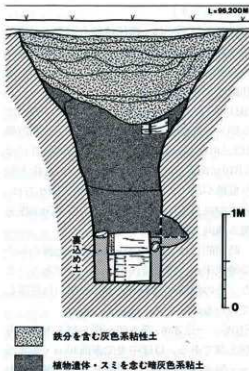
(24-Sトレンチ)

本トレンチでは、平安時代末から鎌倉時代初めの井戸・土壇・溝を検出した。

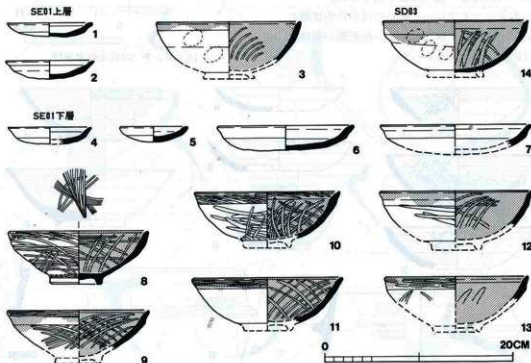
SE01 直径2.3m・深さ2.6m程を測る素掘の井戸である。直径70cmの井戸の掘り方底部に、径45cm・深さ30cmの曲物の桶2個を重ねて井戸枠とする。上側の桶は、上端部が10cm程欠損している。

埋め土は大きく二層に分けることができる。上層の鉄分を含む灰色系粘性土層と下層の暗灰色系粘土層である。下層は、土層堆積や遺物の出土状況から井戸廃絶後の堆積による。上層はその後の整地時のものである。

遺物的には、上層は細片であり摩滅が著しい二次堆積のもの。下層は、上位より木製品が、下位より土器が出土している。木製品は、井戸枠材・杓子のほか卒塔婆が出土した。土器は、12世紀前後の黒色土器の碗・土師器の皿などで、井戸廃絶時期よりそれほど降らないものと考えて良いだろう。



24-Sトレンチ SE01実測図



24-Sトレンチ 土器実測図

遺物 今回の調査で出土した遺物は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・中世陶器・輸入磁器・近世陶磁器などの土器のほか、鋤・織機・曲物・杓子・卒塔婆などの木製品及び、獣骨・種子等の自然遺体などである。

量的には、コンテナで約20箱分である。時期的には、縄文時代晩期から現代にわたる。しかし、その中心となるのは、弥生時代末から古墳時代初めのものと平安時代末から鎌倉時代初めのものであり、これは過去2回の調査における傾向と変わらない。その詳細については、紙数の都合上割愛する。ここでは、卒塔婆について少し補足しておきたい。

卒塔婆は、長さ91cm・幅7cm・厚さ5mmを測る完形品。表裏とも墨書きは認められない。頭部は丸く、体部上半側面の緩やかなえぐりをもち、斎申の大型品のような形態を呈す。共伴土器の時期からも卒塔婆として初源的なものといえそうである。

まとめ 以上、調査の概略を述べた。最後に若干の整理をおこないまとめとしたい。

(地震跡) 近年、各地の遺跡より地震跡の発見が相次いでいる。野尻遺跡も88年度調査において、数箇所の小規模な断層として11世紀以降の地震跡を検出した。本調査においても、昨年度に大規模地震による噴砂を発見。今回の断層は、まさに、この噴砂と有機的な関係にあり、時期的にはその前後の遺構より、13世紀以降から近世期までのものといえる。今後の資料の増加に期待したい。

(遺跡の性格) 野尻遺跡は、縄文時代後期から近世にわたる遺跡として周知されている。本調査地では、弥生時代末から古墳時代初めと平安時代末から鎌倉時代初めがその中心となる。しかしながらその多くは、中世期および近世期の土地改変により、少なからず攪乱・削平を受けており、その全体像を窺えるものは少ない。今後の調査でその全体像が明瞭になることを期待したい。(猿向)



17トレンチ中央部発掘状況(南東より)

⑬ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字下鉤および野尻

調査期間 1991年8月19日～10月6日

調査面積 1950㎡

本年度の調査地は90年度発掘区をはさむようにして2か所に設定された。90年度調査では古墳時代の流路を中心に数本の溝が確認され、また中世墓が1基発見されているため、今回の調査では流路の拡がりや、中世墓周辺の関連遺構の有無が注目された。

北側のトレンチでは北東方向にのびる流路が90年度調査時検出したものの続きとして確認され、南側のトレンチでは数十のピットと区画溝を検出した。しかしながらどちらのトレンチも遺物には恵まれず時代決定には至っていない。さらに地形は南に向けて落ち込みを見せており、野尻遺跡で見られる青灰色粘

質土の基盤層も北に比べて南トレンチでは不安定であった。

中世墓はその回りに同時代の墳墓や住居などの関連遺構、また該当時期の遺物も発見されず、いわゆる単独墓であることが確実となった。中世（この場合は12世紀後半）においては墓は集まって墓地を形成したり、建物の近くに造られたりするが（屋敷墓）、併設の施設をもたないものは珍しい。（橋本）



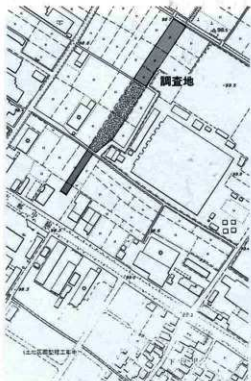
北トレンチ・検出状況



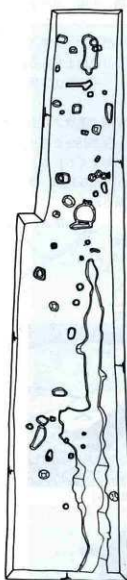
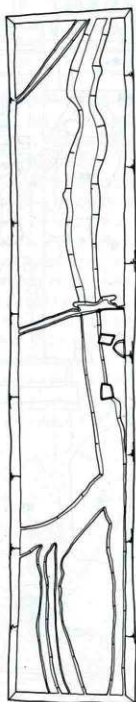
北トレンチ・完掘後



南トレンチ・全景



調査地位置図（斜線部は90年度調査）



0

20 m

左・北トレンチ 右・南トレンチ

調査地遺構図

⑪ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字蜂屋字カシ内397-1、398

-1

調査期間 1991年11月7日～12月28日

調査面積 370㎡

本調査では掘立柱建物、溝、土壇、ピット、葬場などを確認した。

古墳時代前期に通る遺構は溝7で、調査区北端で屈曲する。甕、高杯などの出土がある。

掘立柱建物は2棟とみられ、平安時代11世紀頃の時期である。

土壇5、溝1・2は13世紀頃の遺構で、土壇は長径1.3m、短径1.0m、深さ25cmを測り、壇底には4個の赤変した石材がすえられる。壁面は焼け締り、堆積土内からは炭化物、骨片が出土する。火葬場と判断される。



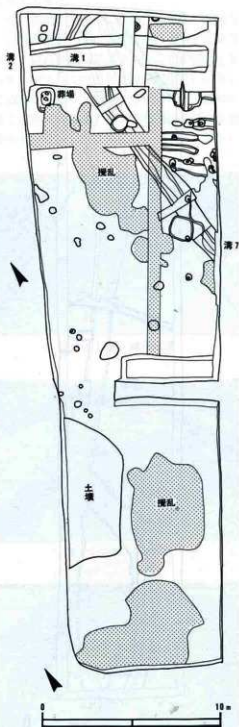
調査地位置図



調査区北半部 (北から)



葬場 (南西から)



調査地遺構図

⑱ 下鉤東遺跡

調査地 栗東町大字上鉤字辻越26-1、28-1

調査期間 1991年2月1日～29日

調査面積 1051㎡

下鉤東遺跡の中でも本調査地周辺は奈良時代の建物跡が確認されている部分である。

しかしながら今回の調査で検出し得た遺構は溝数本と暗渠であった。

溝からは5世紀代と思われる須恵器の杯身片が1点でているがこの時期に属する顕著な遺構は見られなかった。暗渠は下鉤地区を中心によく見られる、樹皮を用いたものでこれにより同様の暗渠は、下鉤、下鉤甲、野尻、上鉤という地域に拡がるのがわかった。

調査地は北西部と南西部では土質に若干のちがいがあ。遺構を検出する面を(標高; 127m) 追っていくと北側は灰褐色粘土であり、南側は茶褐色土で砂をふくんでいる。このちがいが大きく地形の変化をあらわすのか流路などによるものかは判断できなかった。

さらに下に70cm掘り下げると均一な青灰褐

色の粘質土、さらに40cmでシルトとなり、50cmで同色の砂層であった。

茶褐色土の見られる調査地南側では一面に拡がる形で古墳時代の土器が散乱している。

その総量はコンテナケースに半箱であるが遺存状態は良くなかった。(橋本)



調査区全景



須恵器杯出土状況



調査地位置図

⑬ 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字下鈎地先

調査期間 1990年12月6日～1991年3月20日

調査面積 1934m² (総面積)

本調査は下鈎甲区画整理事業区域内における保留地造成工事に先だて行われたものである。区域内は区画整理工事中で、調査は一部それと併行して行われた。

調査区は5か所にわかれて設定されている。

地区周辺では弥生時代の流路が確認されており大量の木製品を出土している。また奈良時代から室町時代にかけての住居跡も点々と見つかっている。

A区

不整形な落ち込みがトレンチ中央部分に見られる他は遺構らしきものは検出されなかった。遺物は包含層の中から石鏃8本を出土している。周辺では鉄類の出土は確認されていない。

B区

このトレンチの南側に河川の改修工事が行



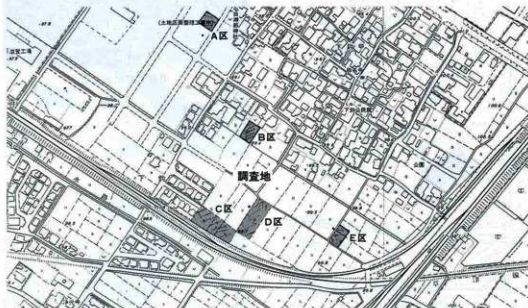
A区全景・南東から

われたためと、東西両側には区画壁、側溝工事が行われたため攪乱が著しかった。トレンチ中央部分の包含層から若干の縄文土器が出土した。細片ではあるが縄文前期にあたるもので、地区周辺では縄文時代の遺跡、遺物ともに認められていないため注目される。

C区

C区では明確な区画溝を検出した。

溝の深さは5～7cmでピットを伴うものではない。この地区も遺物に恵まれなかったため時期は不明である。遺構面の上層も攪乱がところどころに見られ、暗渠に使用した樹皮の残片が混じっているため、溝は暗渠以前の



調査地位置図

ものであろう。

D区

写真中央のピット以外には遺構とおぼしきものは検出しなかった。

E区

十字に交差する暗渠排水を検出した。暗渠内の樹皮は部分的に石を枕にしたり、上から瓦で押さえたりというものが見られた。

(橋本)



C区遺構図



D区全景・南西から



E区全景・南西から



C区全景・北西から

② 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字下鈎字高田716

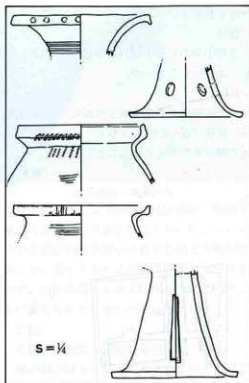
調査期間 1991年3月4日～4月16日

調査面積 300㎡

地区周辺は今回の調査以前に区画整理が行われており、耕作土直下にある遺構面は大きく攪乱を受けていた。面を覆う包含層からは9世紀代の須恵器片、石鏃がふくまれているがこの両時期に対する遺構は下層には存せずまた、周囲の既調査からもこれらの時代の遺構、遺物は確認されていない。今後の調査を頼むとともに、区画整理工事のさいの客土の有無など留意が必要である。

調査地の現況は田であり、整理以前は全体に南西方向に大きく傾斜をする田地であったという。遺構面はマンガン粒をふくむ灰褐色土であるが、その上面5～10cmは攪乱をうけている。この部分をのぞくと比高8cmほどの傾斜があり、その中ほどに北西から南東方向の流路を検出した。前述のように遺構として明確にとらえられることはなかったが、中からコンテナケース1箱ほどの土器が出土した。

右上の図がそれである。劣化がすすんでおり5点のみの復元となった。1は器台、5は須恵器に見られるような長方形の透かしの入ったものである。(橋本)



出土土器実測図



流路中の土器



調査地位置図



土器検出状況

②1 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字苅原字溝端156

調査期間 1991年7月2日～31日

調査面積 640㎡

耕作土下10cmで中世のものと見られるピット群と区画溝数条が検出された。さらに下層はこぶし大の礫の混じる砂層で、この面に調査区の南西部分を半分占める形で流路が確認できた。この流路は隣接地では弥生時代を主とする多量の土器を出土するものだが、本調査区内からは土器は確認されなかった。

(橋本)



上層、中世遺構検出状況。写真下の変色部分が下層の流路



調査地位置図

②2 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字下鈎字西口737-3

調査期間 1991年7月8日～7月11日

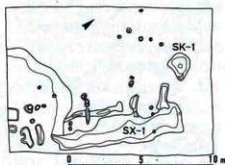
調査面積 150㎡

本調査区では、耕土直下の明黄灰色細砂質土を遺構ベース面として、浅い落ち込み、土壇、ピットが検出された。落ち込み(SX-1)には古墳時代前半の土器が若干含まれていた。土壇(SK-1)からは遺物が出土せず、時期・性格については不明である。

本調査区の北西約100mの地点には平安時代から中世に栄えたと言われる蓮台寺があるが、今回は関連の遺構・遺物はなかった。(雨森)



調査地位置図



調査地遺構図



調査地全景

②3 下鈎遺跡

調査地 栗東町大字下鈎字袂440-1

調査期間 1991年10月1日～1992年1月24日

調査面積 約500m²



調査地位置図

下鈎遺跡は、六地蔵古琵琶湖層丘陵地に源を発する栗山川中流域の左岸に位置する。

過去の調査では、弥生時代中期後葉から後期後葉を中心とする遺構が確認されている。縄文時代の遺構としては、明確なものは確認されていないが、包含層から縄文時代中期から晩期にかけての土器が出土している。

今回の調査地は、中世の遺構を中心とする弥生時代以前の遺構が確認された面と、縄文時代以前の遺構が確認された面が存在する。前者は、地表面から約30cm下げた地点で確認でき、後者は、さらにその面から約30～40cm下げた地点で確認できる。

上層面の遺構としては、14世紀頃と考えられる溝、柵列、井戸、中世以降まで存在したと考えられる旧河道 (SR-1) が確認されている。また遺物から、弥生時代後期後葉頃の遺構が存在していたことが考えられる。

下層面の遺構としては、縄文時代前期の竪穴住居 (SH)、土壇 (SK)、ピットなどが確認され、竪穴住居は、掘り込みの残存するものが2棟確認されている。SH-1は、平面形が楕円形を呈し、大きき約4×3.5m、深き0.4～0.45mで、SH-2は、平面形が不整円形を呈し、大きき約3.5×3.5m、深き約

0.4～0.45mである。2つの住居は、上層から下層まで土器や石器が多量に出土し、竪穴住居としての機能を失った後に、廃棄場として利用されていたことがいえる。この他、ピットの並びから竪穴住居もしくは、何らかの建物であった可能性をもつ場所として、現段階で9ヶ所 (A～I) を想定している。これらの住居に伴う明確な炉 (野外炉も含む) は認められなかったが、SH-1の床面中央に炭化物が集中してみられたので、炉が住居内に存在していた可能性がまったくなかったとはいえない。住居のまわりに存在する土壇は、平面形が円形もしくは楕円形を呈し、断面がやや袋状を呈するものがみられる。そのいくつ



SH-2 内土壇遺物出土状況



調査区西から東方向をみる

かは、貯蔵穴の役割を果たしていたことが考えられる。

出土遺物には、上層の遺物として弥生式土器、須恵器、土師器、黒色土器、信楽焼等が存在し、下層では縄文土器、石器の他に、注目すべき遺物として、SK-17から滑石製の管玉、SH-1から赤彩された耳栓が出土している。縄文土器は、北白川下層Ⅱa式から大蔵山式に比定される時期のもので、器種としては、深鉢、浅鉢、台付鉢、有孔罎付鉢等が存在する。またこれらの土器の中には、関東、中部、北陸等、他地域の影響を受けたものがみられる。

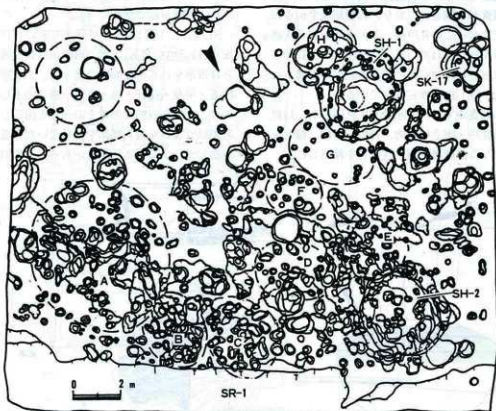
下層で確認された縄文前期の遺構は、西日本においてはあまり明確になっていない居住形態を知る上で重要であり、土器や装飾品等の遺物にみる他地域との関連をさぐる上でも重要な遺跡である。(近藤)



SH-1



SH-2



トレンチ2遺構図

②④ 上鈎遺跡

調査地 栗東町大字上鈎字中田夫224-1

調査期間 1991年4月4日～5月20日

調査面積 500㎡



調査地位置図

上鈎遺跡は、弥生時代から近世にいたる複合遺跡である。本調査区の南隅では、先年度に調査が実施されており、12世紀後半から13世紀にかけての井戸や、5×6間の掘立柱建物等が確認されている。また調査区北西250mの永正寺は、1487年に足利義尚が陣を構えた「鈎の陣」跡と推定されている。

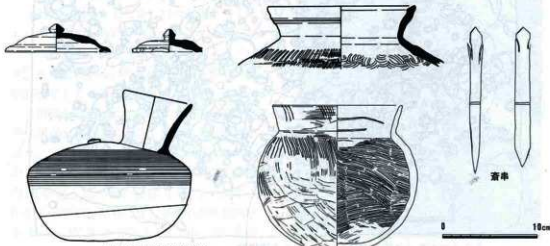
本調査地では、7世紀の井戸(SE-7)、13世紀の井戸・掘立柱建物、15世紀の堀、柵列をともなう区画溝や掘立柱建物を検出した。



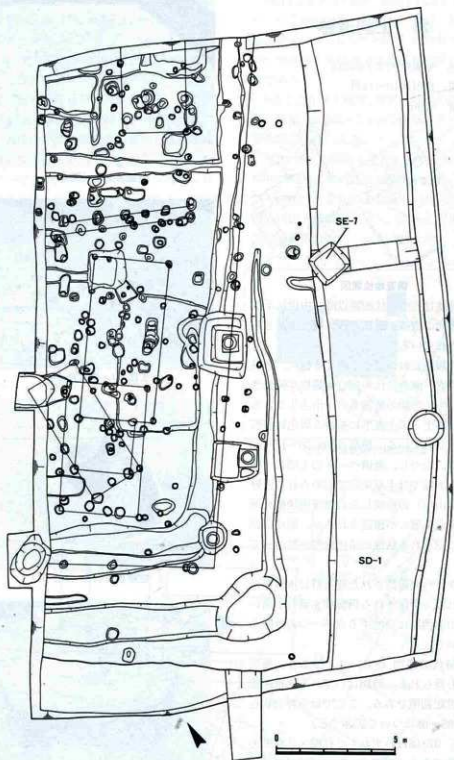
調査地全景

SD-1は、調査地北東から南側に伸び調査地南端で北西側に直角に折れる堀で、幅4.5m、遺構検出面からの深さ約1mを測る。さらにその内側には柵列をともなった幅1mの溝が同様に存在し、区画内に掘立柱建物が数棟建てられている。これらの遺構の時期は、出土した瓦や陶磁器から15世紀代に求められる。この館跡ともいえる遺構は、「鈎の陣」との関連が考えられ重要である。その他、中世の井戸や土壇等が確認されている。

SE-7は、1辺1.4mの平面正方形の井戸で、深さは1.5mを測る。下層の黒灰色粘質土層からは甕串をはじめ土師器の甕・杯、須恵器の杯蓋・平瓶・高杯・碗・甕が一括で出土しており、良好な資料なのでその一部を図示した。乳頭状つまみを持ち端部を打ち欠いた杯蓋は平瓶とセットになる可能性がある。(佐伯)



SE-7出土遺物実測図



調査地遺構図

② 上鈎遺跡

調査地 栗東町大字上鈎314

調査期間 1991年10～11月

調査面積 600㎡



調査地位置図

上鈎遺跡は弥生時代後期以降、中世に至る様々な時代の遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。

今回の調査においても下記する様に、奈良時代や平安～鎌倉時代の掘立柱建物が確認された他、弥生後期の遺物も若干出土している。

遺構は耕土・床土直下に拡がる灰色砂層直下で確認されている。標高は100.30～100.40mである。ただし、遺構ベースの土層は一様でない。東端では手原周辺で認められる旧野洲川（葉山川）の形成した自然堤防状微高地層（黒褐色粘層）が確認されるが、他には低湿地等に見られる粘性の暗灰色層が拡がっている。

つまり、今回確認された建物群は水田等に利用されたと想像される低湿地を望む小高い微高地の南西端に立地する点が一つの特徴となっている。

奈良時代の建物（SB）は8棟あり、柵列（SA）も見られる。時期はいずれも8世紀後半～9世紀初頭である。ここでは全容の明らかなSB05～08について記述する。

SB05、07・08はいずれも2柱間×2柱間の総柱建物である。規模は3.9m×3.9mである。柱穴掘り方は一辺60～80cmの方形を呈する。



調査区全景（東より）



SB-07・08（東より）



柱根出土状況（SB-07）



柱穴掘りかた断面（SB-03）

大半の柱穴に柱抜き取り痕を認めるが、柱根を残す例（SB07）もある。柱根は円柱で径25～30cmを測る。

SB06は2.8m×2.8mの四柱構造の建物である。SB07と切り合い関係を有し、先行する。柱穴掘り方等はほぼ同様である。

柵列（SA）は調査区東端で3列確認されている。方位のずれや柱穴の重複から3期の建て替えと推定される。

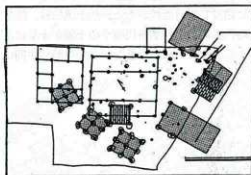
平安～鎌倉時代の建物（SB）は3棟見られる。その規模・形状の違いや配置から、屋敷地内の主屋、副屋、付属屋として想定することが可能である。

SB10は桁行4柱間、梁間2柱間の身舎（もや）の2側面に庇（ひさし）を付す建物。全体規模は10m×8.6mを計る。柱穴掘り方は径40～50cmの円形状を呈する。柱穴径は20cm前後である。

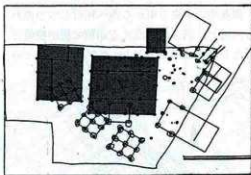
SB11は桁行4柱間、梁間3柱間の総柱状建物。規模は8.2m×6.6mである。柱穴掘り方等はほぼ同様である。

SB09は一部確認し得たに留まるが、梁間2柱間の略南北棟の建物と推定される。

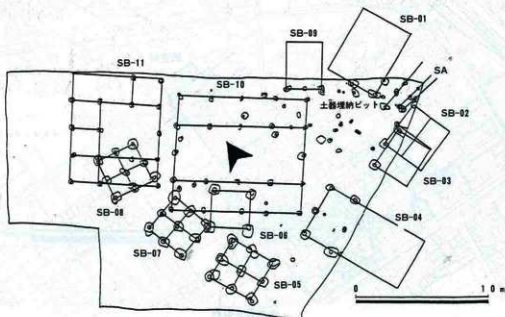
その他、SB10の東には0.8m×0.5mの精円形状の土器埋納ビット（黒色土器碗、土師皿）も見られる。（大崎）



奈良時代遺構配置



平安～鎌倉時代遺構配置



② 中沢遺跡

調査地 栗東町大字中沢字中畑196他

調査期間 I期調査

1990年11月22日～1991年5月31日

II期調査

1991年6月1日～1992年3月20日

調査面積 I期調査 3666㎡

II期調査 7131㎡

この調査は、I期調査をT-1・2・3・4・5、II期調査をT-0・6・7・8・9・10・11・12に分けて実施した。T-2・3については、「1990年度年報」で紹介した。

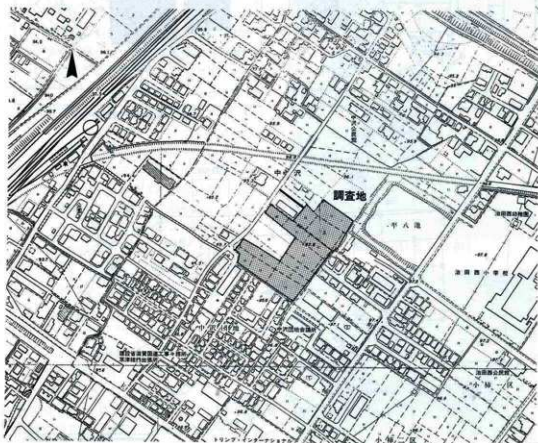
調査地の中央を東から西へ蛇行しつつ流れる河道と、河道が埋没する過程で掘削整備されたと考えられるSD14および同じ流れとみ

られるSD12がこの調査地の中心をなす。

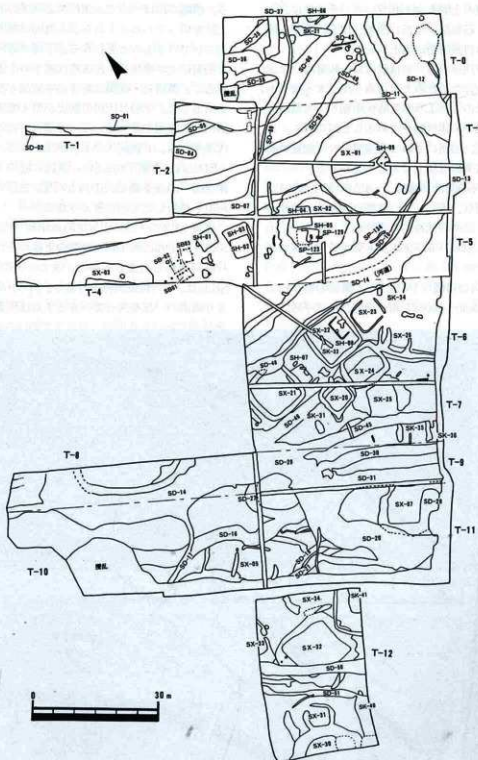
そして、これらに合流する溝、分流する溝など時期により様相が変化する。あるいは埋没直前に流れに沿って新たな溝(SD11)が掘削されたりもする。そして、そのようなSD14の変遷に伴行して集落が営まれ、墳墓群が造営される。

検出遺構

河道：SD14に先行し、幅10mから30m、深さ約2.5mを測る。拳大の円礫を含む砂礫層、粒子の揃った砂層、粘土層、腐植物層等が複雑に堆積し、自然にまかせた河道であったことを窺わせる。最終段階の上層は、淡黄色細粒砂が約80cmの厚い層をなし、洪水等で一気に埋没した可能性がある。出土遺物は、弥生時代末期から古墳時代前半の土器が多量に出土し、その中には少量ながら弥生時代中期か



調査地位置図



調査地遺構図

ら後期の土器も含まれている。その他に、木製品、石製品、また、流木、枝葉、果実の種子等の自然遺物が出土した。

この河道の古い堆積層には、数量的には少ないが弥生時代の土器のみを出土する層もあり、このことより弥生時代中期から古墳時代前半までの年代幅を求めることができる。

また、SD20についても基盤となる細粒砂層は、河道の堆積土であると思われる。

溝：SD06は、溝幅3.5～4.5m、深さ平均120cmを測り、T-0で、北側に入り込む部分がある。弥生時代後期の遺物がまとまって出土した。SD05・07・35・38も弥生時代の溝である。

SD14の溝幅は平均6.5m、溝底の幅は約3m、深さ80～100cmを測り溝底はほぼ平坦であ

る。溝幅がほぼ一定で、先行する河道の堆積土砂を切っていることから、人為的な掘削がなされているものと思われる。下層は細砂礫と粘質砂土が堆積し、古墳時代前半の土器を中心に、農耕具・建築部材等の木製品も多量に出土した。上層は灰褐色粘土が厚く堆積し、沼沢地の様相を見せている。上層は、古墳時代後半から、8世紀代の土器が出土する。

SD20は、溝幅平均6.5m、溝底の幅約2m、深さ60～80cmを測る。SD14と同様、先行する河道を整備したものと考えられる。

墳墓：SX25・32は、弥生時代中期（IV）、SX07・SX30は、弥生時代後期の土器がそれぞれの周溝から出土している。また、SK35とSK36は、その位置関係を考慮し、SD30・45により周溝の一部を失っているとすれば周溝墓



T-6・T-7 空中写真

の可能性がある。SK35から弥生時代後期の土器が出土している。

古墳時代の前半はSX03・24、後半のものはSX01・02・05・20・21・22・23・33・34があげられる。これらは、直径14m前後の円形墳、一辺約11mの方形墳、9m前後の方形墳、同じく6m前後のもの、細い溝が巡りいずれかの角が切れるものなど、形態的に5種類に分けることが出来る。さらに、位置的にも、SD14の北側のSX01・02と、墳形は異なるが規模の大きい部類に属するSX03のグループ、SD14の南側のSX20～24の中小規模のグループ、さらにSD20の南西側のSX05・33・34のグループに分けられ、それぞれが、SD14とSD20により区域分けられている様子が窺える。

竪穴住居：9棟を検出した。そのほとんどが後世の削平を受け、床面あるいは内部遺構

が残るのみである。SH01は、東西4.3m、南北4mの規模で、南壁下に土壌をもつ。SH02は、東西4.3m、南北4.7m、南東隅に土壌をもつ。SH03は、東西6m、南北5m、大型で長方形を呈する。南壁に土壌をもつ。SH04は、東西4.4m、南北4.8mで、東壁に土壌をもつ。SH05は、東西2.7m、南北3m、東壁に土壌をもつ。中央にも土壌があり、北辺の汚れが西方向に広がることから、西側にずれてもう1棟が重複していた可能性がある。SH06は、検出された南壁の一部が5mである。SH07は、東西4.8m、南北4.7mで、東壁に土壌をもつ。SH08は、SX22に切られているため、詳細は明らかでない。南北4.8mを測る。SH09は、SD07を切り、SX01に切られる。壁溝の一部と柱穴の位置から、一辺5.5mの規模が推定される。



T-3・4・5 空中写真



T-8・9・10・11 空中写真

これらの住居からの出土遺物はきわめて少なく、時期を明らかにすることは困難であるが、SH05内の柱穴から4世紀頃の土器の出土があること、形態的にも、壁面下中央に土壇を持ち、竈が付設される以前であることなど、町内の主な集落の例によれば、古墳時代前半期と推察される。

掘立柱建物：SB01は、1間(1.75m)×4間(3.25m)、SB02は、1間(2.15m)×3間(3.05m)、SB03は、2間(2.8m)×2間(2.8m)の規模である。SB03の東と西側の中央の柱は若干外に出ている。これらの建物の柱穴掘り方は、不整形円形を呈し小規模で浅い。時期は明らかでないが、竪穴住居群との位置関係、およびそれぞれの重複関係を考慮すれば、竪穴住居群とともに集落の一角を構成していた可能性は高い。

その他多数のピットが検出された。今後の検討が必要であるが、数棟の掘立柱建物にまともなる可能性がある。また、これらのピットは、竪穴住居を切り、SX01・SX02に切られる。

出土遺物

土器類：大部分は、SD14および河道出土である。総量は、コンテナ（40cm×60cm×14cm）で300箱以上に達する。

木製品：SD14および河道から、丸柱、角柱、木製扉、梯子、板材、長柄鋤、着柄鋤、えぶり、木槌、木鐺、竪杵、臼、案、槽、盤、組材、矢板、杭、薪、など多種多様な木製品が出土した。

木製扉は、表面のほぼ3分の1が炭化している。火災によるものとすれば、焼け方が水平方向であることから、屋根部分からの輻射熱による延焼と考えることができ、炭化部分が上部と考えられる。炭化部分の先端は欠失しており、縦の現存長は133cm、幅は34.8cm、板部の厚さは約3cmである。門受けは分銅形に削り出されており、長さ49.5cm、基部の幅は25cm、中央のくびれ部の幅は5.5cm、厚さは

板部を含め8.5cmである。また、門受けには縦10cm、幅3.5cmの孔が板部をやや削って穿たれている。さらに、扉の下部には長方形の浅い彫り込みが2箇所見られ、内部に1ないし2箇所の小孔が穿たれている。

えぶりは、縦13cm、横30cm、厚さ1.2～2cmを測り、中央は約1cm厚く削り出されている。歯は7本あるが、柄孔は見られず、未製品と思われる。他に数点の出土がある。

着柄鋤（なすび形）は、全長52.7cm、最大幅は18cm前後と推定される。歯部の長さ26.3cm、幅7cm、厚さ0.7cm、刃先の厚さは、0.3cmである。このタイプのものは破損品を含め数10点出土している。

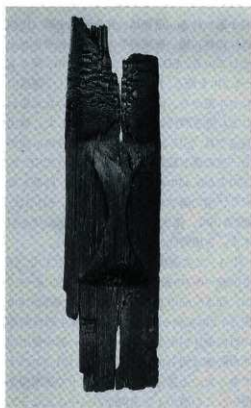
石製品には、打製・磨製の石鏃、柱状片刃石斧、偏平片刃石斧、石庖丁、石錘、剝片、砥石等がある。（平井）



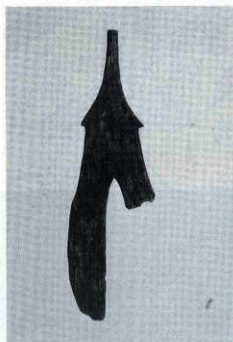
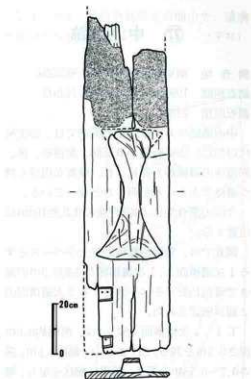
案出土状況（SD-14）



河道出土土器



木製扉



着柄御



えぶり



梯子出土状況（河道）

② 中沢遺跡

調査地 栗東町大字中沢字大將軍256

調査期間 1991年8月19日～8月28日

調査面積 225m²

中沢遺跡における近年の調査では、弥生時代の他に、古墳時代の墳墓群、集落跡、溝、河道等の遺構群も発見され、豊富な内容を持つ遺跡であることが明らかとなっている。

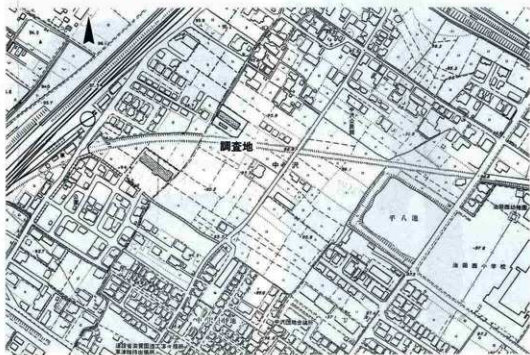
今回の調査地は、②調査地の北北西100mに位置する。

調査では、黄灰色粗粒砂質土をベースとする1次遺構面と、1次遺構面から約0.3mの深さで黄色粘質土をベースとする2次遺構面の2面が確認された。

T-1 1次遺構面：SD-1は、溝幅約0.8m、深さ0.5mを測る。SD-2-①は、幅約3.5m、深さ0.7～0.75mを測る。断面は碗状を呈し、溝底のレベル差から、東から西へ流れていたも

のと思われる。遺物は、弥生時代中期（IV様式）の鉢、甕、後期前半の長頸壺の破片が出土している。SD-2-②は、幅約2.5m、深さ1～1.2mを測る。断面はV字形を呈し、溝底のレベル差から、南から北へ流れていたと思われる。弥生時代後期の土器が出土した。検出時点では、SD-2-①とSD-2-②は直角に曲がる一連の溝と認識していたが、交点でSD-2-②の方が0.45m深く、また、形状、時期も異なり、別の溝であることが判った。SD-3は、幅約1.5m、深さ0.5mを測り、断面皿状を呈する。古墳時代の土器片が出土した。

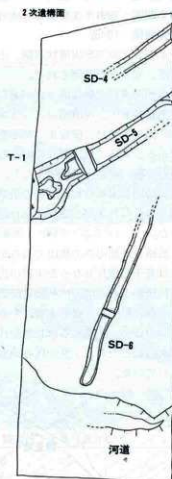
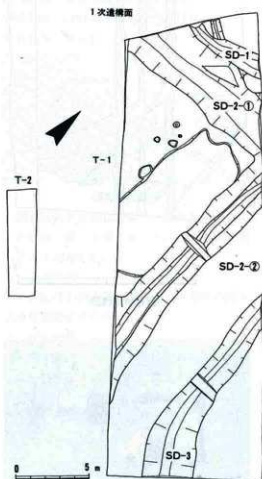
T-1 2次遺構面：SD-4は、幅約1m、深さ0.35～0.4mを測る。SD-5は、幅約0.8～1.7m、深さ0.65mを測る。SD-6は、幅約0.8m、深さ0.2mを測る。SD-6からは弥生時代前期の壺の破片が出土した。河道は一部の検出のため詳細は明らかでないが、深さは1.9m以上であった。上層は黄灰色粗粒砂質土で遺構面を覆い、この層が1次遺構面のベースとなって



調査地位置図

いる。下層は、粗い砂が厚く堆積し、弥生時代中期(Ⅲ～Ⅳ様式)の土器片数点が出土した。

T-2: 明るい黄灰色粘質土の地山で、遺構は検出されなかった。(平井)



調査地遺構図



1次遺構面



2次遺構面

② 十里遺跡

調査地 栗東町十里136-2、138-2

調査期間 1991年4月12日～4月26日

調査面積 190㎡

本調査では方形周溝状遺構、土壇、流路、小溝、ピットが確認された。

方形周溝状遺構は溝3辺が遺存した。台状部南北長8m、周溝幅は2～3mを測る。後世の削平を受け、溝底まで30cmを計るばかりである。北辺では丹塗りののこ高杯形土器、壺形土器、甕形土器が出土した。弥生時代後期に時期を求められる。この遺構は方形周溝墓と考えられるが、墓坑などは認められなかった。

流路は肩部のみの検出であるが堆積土内からは若干の細片となった土器が出土し、弥生時代後期から古墳時代初頭に時期を求められる。器台形土器、甕形土器片である。

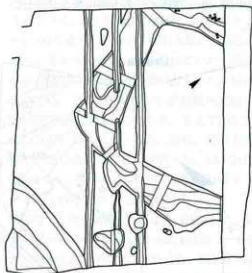
このほか、小溝からは12世紀代頃の土師器皿が出土したが、7世紀代の須恵器杯身が混入していた。(清水)



調査地位置図



方形周溝状遺構 (南から)



調査地遺構図



高杯形土器出土状況(北辺溝内)



土器出土状況 (北辺溝内)

② 雑遺跡

調査地 栗東町雑812-2、813-2

調査期間 1991年2月26日～5月18日

調査面積 415m²



調査地位置図

調査区を2カ所に設定し、調査を進めた。
この結果、溝、土壌、ピット、沼沢地状の落ち込みを確認した。

1. 古墳時代

6世紀代の須恵器杯身片が沼沢地状の落ち込み堆積層にみられた。

2. 平安時代

屈曲する溝4条がこの時期にあたる。9世紀代～11世紀代にかけて、溝2・3・4・1の順に用いられたものとみられる。同じような方位・規模をもっており、継続的に区画を

あらわしたものとみられるが、出土遺物も少なく、建物等の関連施設も確認されないため性格は明らかでない。

3. 中世以降

土壌5基は鎌倉時代以降の所産である。

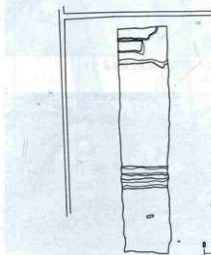
(清水)



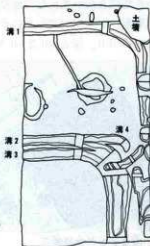
調査区1 (南半・北から)



調査区2 全景 (西から)



調査地遺構図



③〇 靈仙寺遺跡

調査地 栗東町靈仙寺南馬廐

調査期間 1991年4～6月

調査面積 750m²



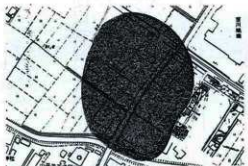
調査地位置図

靈仙寺遺跡は縄文時代中期以降、近世に至る各時代の遺構・遺物を残す複合遺跡として周知されている。中でも弥生時代のそれは中ノ井川中流域において唯一前期土器の出土を見る遺跡として知られている。

今回の調査においても下記する様な弥生時代前期～中期前葉の遺構が確認された他、8～9世紀の掘立柱建物5棟も認められた。

遺構はいずれも耕土・床土下の黄灰色～淡青灰色粘質土層上（標高：90.60～91.30m）にある。弥生時代の遺構には3条の溝や流路、土壇等が見られる。

溝：南西から北東方向へ並行して延びる3条の溝で、北東端で北方向へ緩やかにカーブする。幅員2.5～3.0m、深さは0.3～0.5mを



環溝集落想定規模

測り、断面逆台形状を呈する。その形状・配置から集落を囲繞する3重の環溝の一部と成る可能性が高い。

流路：3条の溝に先行し、蛇行気味に西流する。幅員5.0m、深さは0.3～0.6mを測る。埋土は大略2層から成る。上層は黒灰色粘土層、下層は細砂内に帯状に有機質層が混じった汚砂層である。

土壇には様々な規模・形状のものが見られる。その内、SK04は2.5m×1.1mの楕円形状を呈する。

これらの遺構からはいずれも弥生土器や木製品、石製品が出土している。木製品にはスキ・クワ（溝）、クワ製品・木製品（流路）、スキ（SK04）がある。出土土器は最近の近江の編年案（兼康：1990）に準拠すれば、以下の様に位置付けられよう。

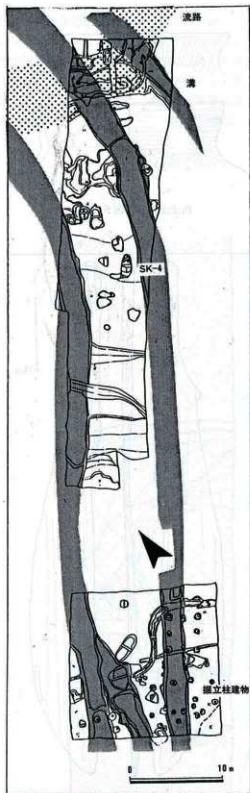
- ・溝：I-4～II様式
- ・流路上層：I-2・3様式
- ・流路下層：I-1様式



調査区全景（南より）



調査区全景（北より）



調査地遺構

・SK04：II様式

環溝状遺構の範囲は現況の地勢を考慮すれば、径150m前後の規模を想定するのが最も妥当であるが、その規模・形状や機能については今後の調査において正確に把握してゆく必要があり、将来の検証を待ちたい。

参考文献：兼康保明『近江地域』弥生土器の様式と編年・近畿編II 1990年（大崎）



スキ出土状況 (SK-04)



クワ出土状況 (流路)



土器出土状況 (流路)

③ 霊仙寺遺跡

調査地 栗東町大字霊仙寺宇南松馬鹿358-1、360-1、361-1

調査期間 1992年3月4日～31日

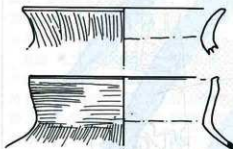
調査面積 350㎡

本調査地は、霊仙寺遺跡1990年度調査の南東隣に位置している。このため両トレンチの遺構の関係は右頁のようで、90年度にSD-6と名付けられた溝が連続して検出されているのがわかる。SX-1はSD-6によって方形に区画されているため墓地ではないかと思われたが、SD-6の拡がりを見る限りではその性格は断定しがたいものである。

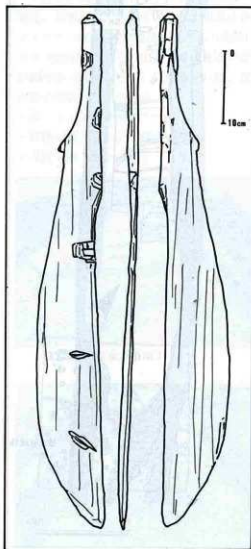
今回検出されたSD-6に続く溝は幅1～3m、深さ0.3～0.5mで埋土は黒茶褐色土、埋土中には長さ1m程度の柱状の木が4本混入していたが明瞭な加工痕は見られないものであった。最下層には部分的に5～10cmの砂がある。1～2mmほどの茶褐色の荒砂で、この砂はトレンチの北東隅部分でも大量に見られた。この地の基盤層である青灰色粘質土は1m掘り込むとシルト、さらに砂質へと変わるがこれとは異なる砂質である。

遺物は溝最下層の砂から出土した。

庄内併行期の土器2点はどちらも残存率10%ほどの少片である。木器は「なすび形着柄鋤」や「反柄叉鋤」と呼ばれるもので、鋤説、



出土土器実測図 S=1/4



出土木器実測図

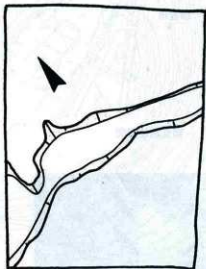
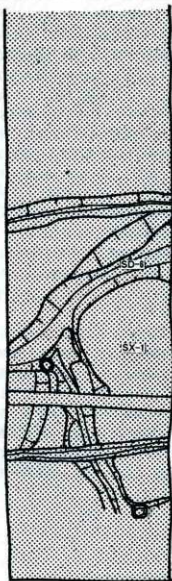


調査地位置図

鉄説、鋤鉄兼用説がありまだ見解の一致していないものである。同様の木器は町内では4点確認されているが本遺跡のものは最も大型である。半分しか残っていないがアカガシ亜属の木を用いた完成品で、顕著な使用痕は認められない。(橋本)



調査区西から



調査地遺構図
(網かけ部分は90年度調査)

③ 堂山古墳群

調査地 栗太郡栗東町大字六地藏宇堂山

調査期間 1991年12月10日～12月20日



調査地位置図



盗掘坑



墳丘 SEC-1

堂山古墳は野洲川左岸の沖積地を見おろす六地藏の丘陵上に所在する。同一丘陵上には、三角縁神獣鏡を出土した4世紀の円墳岡山古墳がある。堂山古墳はその丘陵地の東端付近に位置し、標高は墳丘最高部で132.5mである。また、谷を挟んだ北東側の日向山には、日向山古墳群が存在する。かつては7基の古墳が存在したという現在では3基が残存しており、内1基は径18mの円墳で横穴式石室が良好な状態で遺存している。

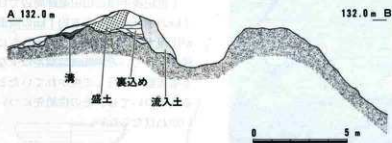
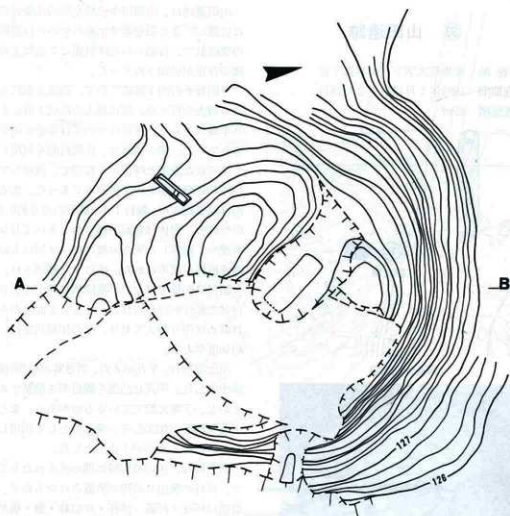
堂山古墳は、古くからその存在が知られており、「栗太郡志」にはすでに江戸時代には石室の石が抜き取られたという記述がみられる。調査前の状態は、墳丘上部の東側約半分がけずられており、墳丘状の高まりの中央部には石抜きか、盗掘坑と推定される長さ7m、幅3.5mの落込みが存在した。調査は保存を前提とした確認調査のため立木の伐採の後、地形測量を行い、中央部落込み埋土の除去。削られて露出している墳丘断面 (SEC-1) の観察。そして、墳丘を尾根から分断するために設ける溝の推定位置に、長さ2m、幅0.5mのトレンチ (T-1) を設定した。

調査の結果、T-1及びSEC-1にて、幅1.5m、深さ0.5mの溝を確認した。その事により墳丘は直径17m、残存高2mの円墳と考えられよう。

主体部は完全に破壊されており、その形状は不明であるが、墳丘断面の観察により、横穴式石室にみられる裏込め状の盛土を確認した。また出土遺物は、裏込部分と落込み埋土中から器種不明の須恵器片各1点が出土した。

栗東地域では丘陵に立地する後期古墳の調査例は少なくその実態はつかめていないが、今回の調査は、その一端を伺う資料となった。

(佐伯)



堂山古墳墳丘測量平面図・断面図

③ 山田遺跡

調査地 栗東町大字下戸山字狐ヶ谷

調査期間 1992年1月13日～2月28日

調査面積 45m²



調査地位置図



遺物出土状況

山田遺跡は、金勝川中流域左岸の丘陵谷部に位置し、瓦と須恵器を生産していた白鳳期の窯跡群で、谷沿いの丘陵斜面に7基以上の窯の存在が周知されていた。

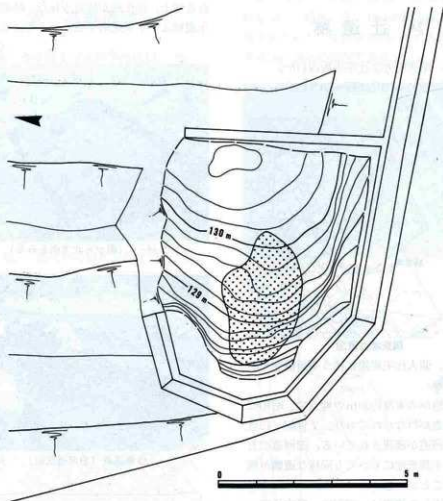
今回はその内1基について、造成工事先立ち調査を行った。窯は過去の造成工事により半壊しており、灰原については完全に削平されていた。窯の構造は、丘陵斜面を利用して作られた登窯と呼ばれる竈窯で、残存していたのは焼成部の上半部のみであった。焼成部は長さ約4m、幅約1m、側壁の高さ約0.4mを測る。窯体は数回の補修がなされており、窯壁や、崩落した天井の塊には、4回以上の補修痕跡が認められた。床は3面確認され、1面目は明確ではないが階段状に粘土を張り付けた部分が認められた。そして2面目からは斜めに作り替えており、その傾斜角度は、約30度である。

出土遺物は、平瓦が8点、須恵器が約100個体出土した。平瓦は凸面を縄目叩き調整するものと、丁寧に撫でているものがある。また、平瓦を円形に加工して、焼き台として利用したと思われるものが1点出土した。

須恵器は、床の補修時に埋め込まれたものや、最終の窯出しの際に放置されたもので、器種は杯身・杯蓋・高杯・片口鉢・盤・甕がある。杯身には逆八の字型に口縁が伸びるものと古墳時代の蓋に似る形のものがあり、後者の方が古いタイプである。また、これらの遺物の時期は、7世紀の第3四半期と考えられる。

7世紀後半頃の山田遺跡周辺では、北方約2kmの手原廃寺や西方約1kmの岡遺跡に官衙が出現するが、当窯跡は、それらに先行して操業されている。特に時期差は少ないにしても須恵器に先行して焼かれていたと考えられる瓦については、その供給先について考えていかねばならない。

(佐伯)



山田竈平面実測図



出土遺物実測図

③ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字辻字小坂西418-5

調査期間 1991年10月15日～10月25日

調査面積 約200㎡



調査地位位置図

本調査は、個人住宅建設に伴う事前調査である。

本調査地から東南約30mの地点で、昭和62年度に調査が行なわれており、7世紀～13世紀頃の旧河道が確認されている。旧河道の方向から、本調査地においても同様な遺構が検出されることが予想されていた。

今回検出した遺構は、旧河道、竪穴住居、ピットがある。

旧河道は前述した地点で検出されていた遺構の続きと思われ、南東から北西へ向かって延びる。検出した長さは、約13m、幅70mで、深さ約40～85cmである。時期は、出土遺物より大きく7世紀代と10世紀から13世紀代の2時期に分けられる。

竪穴住居は、方形プランを呈し、検出した大きさで約3×3.6m、深さ約20cmである。周囲には、幅約30cmの壁溝を認める。住居床面にはピットを数ヶ所認めるが、柱穴らしきものはない。しかし西側と東側の壁際に、柱穴の可能性をもつ対応するピットが認められる。また、南壁の東隅には、カマドの一部と思わ

れる焼土、炭化面が認められた。時期は、出土遺物より7世紀前半頃と考えられる。

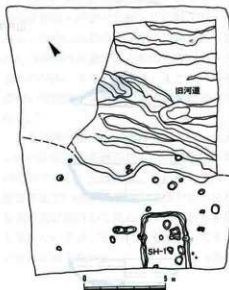
(近藤)



SH-1 (南から北方向をみる)



作業風景 (旧河道周辺)



調査地遺構図

③ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野字西浦332-1他

調査期間 1992年1月21日～2月22日

調査面積 132m²

今回の調査地は、高野遺跡の東端に位置し、現況は水田である。

遺構検出面は、北端で水田面より25cm、南端で深さ45cmを測り、南へ緩く傾斜する。地山土は、柱穴列付近は褐色気味の黄色粘質土、SK-2からトレンチ中央付近は淡黄褐色粗砂質土、SK-2付近は黄灰色粘質土であった。

SK-1は、一辺4mの隅丸方形を呈し、深さ35cmの土壇状遺構である。底面は中央が深く皿状を呈する。埋土の上層は地山土より暗い色調の黄褐色粗砂質土、下層は暗褐色粘質砂土であった。内部の遺構はみられなかったが、底面下で約20cmの丸石が出土した。

SK-2の詳細は明らかでない。深さは10cm、埋土は灰褐色粘質土であった。

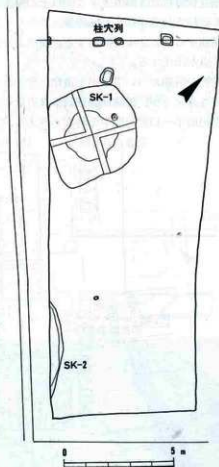


調査地位置図

柱穴列は、一辺30～70cmの方形あるいは矩形を呈し、埋土に5～10cmの焼土塊が多量に含まれていた。柱痕跡は明らかにし得ず、深さは10～20cmの残存である。(平井)



調査地全景



調査地遺構図

③6 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町総614-4、614-5
 調査期間 1991年7月2日～7月10日
 調査面積 80㎡



調査地位置図

本調査では掘立柱建物1棟、溝、土壇、ピットを確認した。

掘立柱建物は3間以上×3間以上の規模を測る。柱穴は直径10～15cm程度。

屈曲する溝は北東で開口する。溝内より鉄釘1点が出土する。

建物の時期については出土遺物に恵まれず明確さを欠くが、近隣地調査結果を考慮し、12世紀前半～13世紀前半の時期と考える。

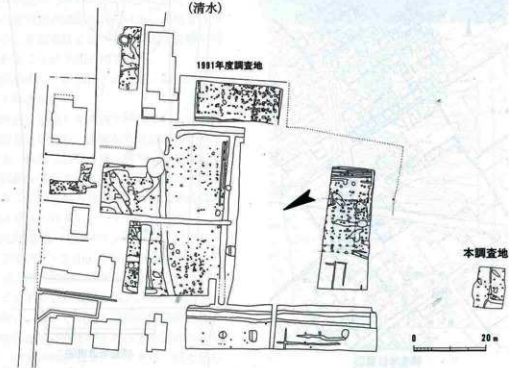
(清水)



調査地遺構図



調査区全景 (東から)



③⑦ 綾 遺 跡

調 査 地 栗東町綾62

調査期間 1991年8月5日～8月13日

調査面積 217m²

本調査地はそのほとんどが擾乱され、遺構だけでなく自然地形も見出し難かった。かろうじてのこった茶褐色系の自然堆積層を切って溝3条、柱列が確認できた。

柱列は溝1・2を切ってつくられる。3乃至4間あったものとみられ、全長6.7mを測る。柱穴は直径約10cm。

溝1は幅1.7m、深さ25cm程を測る。溝内には灰褐色系の堆積土がみられる。

遺構の時期を判断できる遺物はなかった。

(清水)



調査地位置図



調査地遺構図



調査区全景 (西から)

③⑧ 綾 遺 跡

調 査 地 栗東町綾800

調査期間 1992年3月5日～3月12日

調査面積 38m²

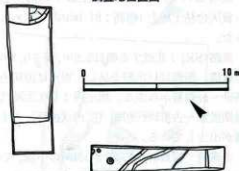
本調査では2カ所に調査区を設定し、沼沢地状の落ち込み、ピット、土壌を確認した。

本調査地周辺には低湿地が広がるが、水田耕作面下約50cmに暗黄灰色粘質土を切って黒灰色粘土層が約30cm落ち込む。この層には古墳時代前期の土器が細片となって包含されている。甕形土器や壺形土器がある。ピットも3カ所確認した。

土壌は耕作面下30cm、床土直下で検出され深さ90cmを測る。中世の遺物包含層を切っており、中世以降の時期と解される。(清水)



調査地位置図



調査地遺構図



調査区2 (西から)

③ 十里遺跡

調査地 十里字北ノ口

調査期間 1991年9月

調査面積 300㎡



調査地位置図

十里遺跡は雲仙寺遺跡の北西に隣接し、弥生時代後期以降、中世に至る複合遺跡として周知されている。

今回の調査では下記する様に、弥生時代の流路や中世以降の小溝群（耕作痕）の他、明確な時期を特定し得ないものの、多数の土塊状遺構が確認されている。

遺構はいずれも耕土・床土直下の褐灰色～黄灰色粘土層上（標高：91.00m）で認められた。

流路(SR)：北流する幅員2.0m、深さ0.3mの遺構。断面はU字形を呈し、埋土は汚灰色細砂～砂礫層から成る。埋土内より弥生時代後期後葉～古墳時代初頭（庄内式併行）の土器が出土している。

小溝群：幅員0.7m、深さ0.1mの小溝。いずれも現状地割（栗太主条里）と併行する。中世以降～近代の遺構である。

土塊状遺構 (SK)：流路の西側の一基 (SK01) 以外は明確な時期を特定し得ない。

SK01は2.2m×0.5mの不整楕円形を呈する。埋土は汚灰色砂層から成る。流路出土土器と同一期の土器細片を出土する。

その他のSKはいずれも黒褐色粘土の埋土を有する。その形状から6類に大別され、ま



調査区全景



土塊F類



SK01



小溝群

た主軸の相違から2グループに区分される。

・A類：長径2.0m前後、短径0.5m～0.8mの
不整長方形～楕円形状。

・B類：長径1.2～1.6m、短径0.4～0.8mの
不整長方形～楕円形状。

・C類：0.8～1.2mの不整形形状。

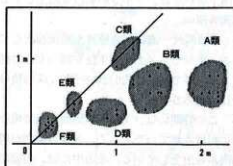
・D類：長径0.7～1.0m、短径0.4m前後の不
整長方形～楕円形状。

・E類：0.5m前後の不整円形状。

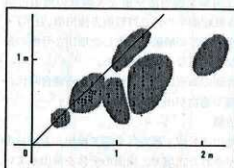
・F類：径0.2～0.4mの円形状。

埋土からの出土遺物はわずかに数点の土器
細片を見るにすぎない。あえて時期を特定す
れば、弥生時代以前と推定されるが、充分な
確証があるわけではない。当然、遺構の性格
等についても論及するすべはない。ここでは
滋賀里遺跡例（晩期土墳群）との比較・対照
を参考として提示し、今後の調査に備えたい。

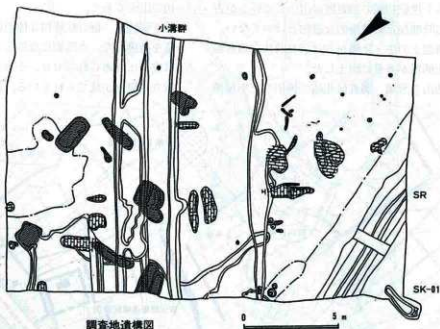
参考文献：湖西線関係遺跡発掘調査団『湖
西線関係調査報告書』1973年 （大崎）



十里遺跡土墳規模分布



滋賀里遺跡土墳規模分布



調査地遺構図

④ 岡 遺 跡

調 査 地 栗東町大字目川

調査期間 1991年7月9日～11月28日

調査面積 2250㎡

岡遺跡は、沖積低地を望む丘陵地先端付近に位置している。調査は団体営圃場整備にともない、1986年から継続して実施されており、古墳時代前期から近世に至る様々な遺構が確認されている。特に第1次調査で確認された近江国栗太郎衙跡や第5次調査の地山古墳（5世紀前半の帆立貝形前方後円墳、91m）・4世紀後半の埴輪が出土した地山2号墳の調査など貴重な発見があった。

今回の調査区では古墳時代から鎌倉時代の遺構や遺物が出土した。

古墳

地山4号墳 調査区東端で検出した墳丘を削平された古墳で、周溝の全体を検出していないが円墳と思われる。規模は墳丘直径18.5m、周溝幅3m、深さ55mを測る。周溝底部から7世紀初頭の須恵器が出土しているが古墳の時期決定に積極的な遺物とはいえない。周溝埋土の中・上層からは奈良時代の須恵器や土師器が多量に出土した。

地山5号墳 調査区北端で検出した小規模

な方墳で墳丘は1辺約7m、周溝の幅1m、深さ0.3mを測る。墳丘中央やや北西寄りには長さ2.5m、幅1mの墓壇が残存していた。主体部は組合式木棺の直葬で鉄刀一振と滑石製小玉204個が副葬されていた。

他に古墳時代の遺構は土壌を数基確認している。

飛鳥時代 長さ6m、幅3～2mの不整形の土壌（SK-5）がある。7世紀前半の須恵器（杯身・高杯・短頸壺）と伴に銅鉾石が出土した。また、土壌に隣接している4号墳の周溝下層からは、フイゴの羽口も出土しており興味深い。

奈良時代 高床式倉庫跡を12棟検出している。すべて2×2間の東柱を持つもので掘り方は円形で柱痕は約0.2mを測る。床面積は約16㎡である。

この時期には、4号墳の周溝は廃棄場などに利用されていたらしく、多量の遺物が周溝内から出土している。その中には、円面硯・把手付中空円面硯・土馬等も含まれていた。岡遺跡での陶硯の出土は12点となり、土馬は初の出土である。

平安時代 掘立柱建物3棟の他に溝や土壌墓を検出した。当該期になると4号墳の周溝は完全に埋められており、それを切り込んで掘立柱建物が建てられている。遺物の大半は、



溝や包含層からで、土師器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土している。また、2箇所の柱穴から、延喜通宝41枚と乾元大宝15枚が土師器の杯と共に出土した。

鎌倉時代 掘立柱建物の柱穴から黒色土器の碗と下駄が出土している。

以上が調査の概略だが、倉庫群の発見や陶硯・土馬等の出土は、当調査区が郡衙遺構の隣接地という特徴を示す資料といえる、また古墳2基の発見で地山古墳群の古墳数は計8基となった。

(佐伯)

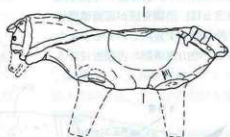




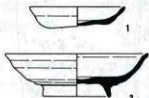
延喜通宝



乾元大宝 S=1/1



4



1

2



3



5



6



7



8



9

1. 土師器 皿 (包含層平安時代)
2. 土師器 杯 (包含層平安時代)
3. 把平付中空円面硯 (奈良時代)
4. 土 馬 (奈良時代)
5. 須恵器 壺 (包含層飛鳥時代)
6. 須恵器 杯蓋 (SD-2飛鳥時代)
7. 須恵器 杯身 (SD-2飛鳥時代)
8. 須恵器 杯蓋 (SD-2奈良時代)
9. 須恵器 杯身 (SD-2奈良時代)
10. 須恵器 罐 (SK-1飛鳥時代)
11. 須恵器 高杯 (SK-3奈良時代)



10



11

出土遺物実測図 S=1/4



調査地全景



土馬出土状況



銅銭出土状況



高床式倉庫跡

④ 下鈎遺跡

調査地 栗東町下鈎717-6

調査期間 1991年7月15日～7月24日

調査面積 78m²

本調査では2カ所に調査区を設定し、調査を進めた。

遺構は水田耕作面下30cmで茶褐色系の礫混りの土層を切り込んで溝、自然流路が確認された。

自然流路は幅10m以上あり、調査区で捉えきれなかった。深さは一部断ち割りの状況では70cmを計った。流路内の堆積は上層に灰褐色系の土層、下層には暗灰青色粘土が確認された。遺物の出土は多量にのぼる。流路肩部に須恵器・土師器が存在した。

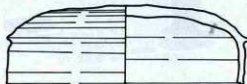
須恵器では杯身・杯蓋・甕などがみられ、5世紀代に遡る。(清水)



調査地位置図



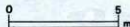
遺物出土状況(流路内肩部)



流路出土須恵器実測図S=1/2



調査区1 全景(東南から)



調査地遺構図

④ 林 遺 跡

調 査 地 栗東町大字林277の14

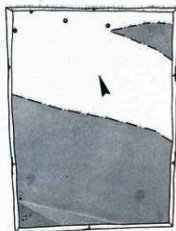
276の一部、276の1の一部

調査期間 1991年9月9日～18日

調査面積 320㎡

林遺跡では古墳時代後期の集落跡、奈良時代の住居が確認されている。本調査地では時代の決定には至らなかったが河川を検出しており、人の生活環境として重要な河川のは、遺跡の周囲への拡がりが見えてくる。

(橋本)



調査地遺構図



調査地位置図

発行日 平成4年8月1日

編集・発行 勸業東町文化体育振興事業団
滋賀県栗太郡栗東町川辺390-1
栗東町民体育館内

TEL.0775-53-4321

印刷・製本 宮川印刷株式会社

滋賀県大津市富士見台3-18

TEL.0775-33-1241